



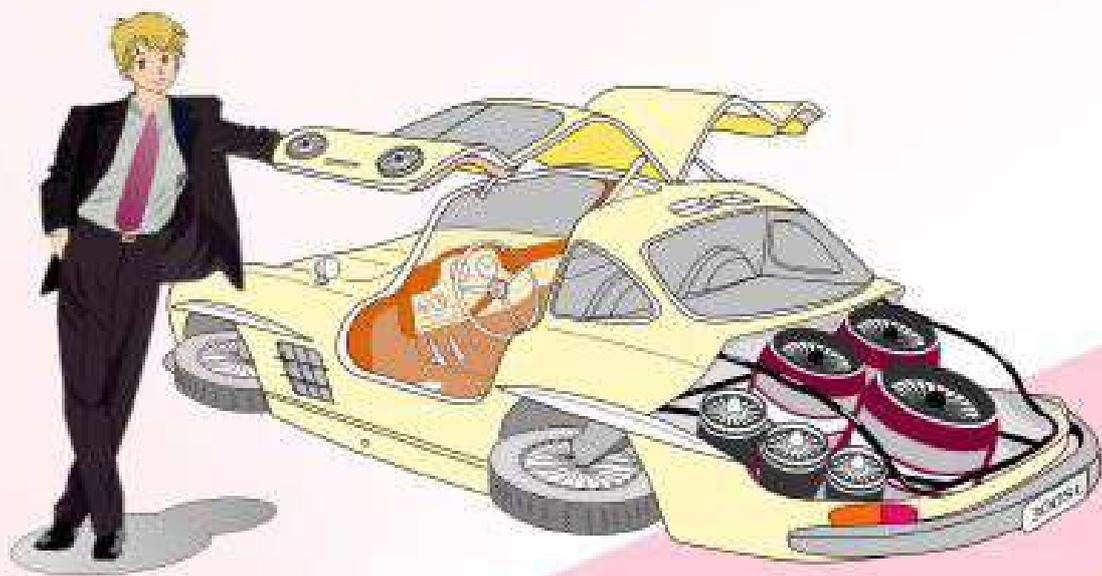
TAB COP2





TAB COP2





TAB COP2





TAB COP2



T A B C O P - 2

かたい純一

(人物一覧表) TABCOP-2

雪家一馬(23)…英国に留学後、帰国

中島政弘(23)…生田インターナショナル・総務課

中島裕子(24)…政弘の妻

中島祐斗(00)…政弘・裕子の長男

生田正信(24)…裕子の双子の弟・生田インターナショナル・
未来開発室

生田祐介(67)…生田インターナショナル・会長 裕子・正信
の父親

立花謙吉(32)…警視庁特殊捜査課総括・管理官

松藤邦博(51)…警視庁特殊捜査指令課課長・警部

島田 隆(32)…警視庁特殊捜査D課課長・警部補

江崎和彦(30)…竜宮城（I I 7）の特任パイロット

雪家智子(48)…一馬の母

森田利文(57)…組織のボス

森田レオナ(27)…利文の娘

副署長(59)…所轄警察署・副署長

佐藤美佑(25)…同・受付係

大淵裕一(42)…中島のボディガード兼運転手

アラン(31)…生田インターナショナル・未来開発室

大橋結日(11)…臍臓移植手術を待つ少女（ゆいか）

大橋晴久(08)…結日の弟

大橋憲弘(40)…結日の父親（のりひろ）

大橋佳奈子(36)…結日の母親

城員…竜宮城（I I 7）の作業員

構成員…組織の作業員

アマゾン…UTA戦闘機パイロット

ハリケーン…UTA戦闘機パイロット

パルテノン…UTA戦闘機パイロット

アップル…UTA戦闘機パイロット

(あらすじ)

TAB COP-2

東京数理大学の後輩先輩である中島政弘と生田裕子。中島の卒業を機に結婚し一児（祐斗）を授かる。その結婚披露パーティー（生田インターナショナル主催）で誘拐される祐斗。中島の同級生である雪家一馬（半月前に留学先の英国より帰国）がパーティー会場から出て行った不審バイクを円盤型乗用ドローン『アランドロン』に乗って追跡しライダーを確保するも、透明カプセルに入れられた祐斗を謎のドーナツ型ドローンに（土星のように）格納され連れ去られてしまう。

所轄警察署での取調べは難航。その上、ライダーは副署長を人質に取り、居合わせた一馬の車で一緒に逃亡する。

一馬は、組織のアジトに連れていかれて誘拐された祐斗と再会する。ライダーは組織のボス（森田）の娘（レオナ）であることが判明する。祐斗の世話を嫌々始めるレオナだが次第に母性に目覚めてゆく。その後、一馬は麻酔を打たれ、気が付くと、裕子が理事長を務める難病のこども支援施設『ゆう愛の家』のベッドに寝ている。その後回復した一馬は中島の案内で、ゆう愛の家の地下に向かい、『竜宮城』と呼ばれる警視庁統治の裏の警察が存在することを知る。

一馬は、その竜宮城で三年前自分が追い詰めた『犯人江崎』と意外な再会を果たす。また、UTAと呼ばれるシステムを使って自宅の部屋から、数mある大型ラジコン戦闘機等を操縦するラジコン愛好家の存在を知る。

そして、ゆう愛の家で少女に移植するための臓器が搬送中に強奪される。強奪事案も誘拐事件と繋がっている可能性が高いため、竜宮城が第一司令部として動く。一馬は、松藤・島田らの推薦を受け竜宮城でアルバイトの特殊作業員（スパイ気取り）として任務に就くこととなる。

組織と竜宮城とで駆け引きが始まる。森田の、生田インターナショナル（の会長、生田祐介）への復讐が始まる。組織は海の上に『二択ボード』と呼ぶ発泡スチロールボードを浮かべる。ボードの上にはドーナツ型ドローン一機と、カプセルが二つ並んで置いてある。一つは祐斗カプセル、もう一つは臓器カプセル。どちらか一つのカプセルをドーナツに格納した時点で、もう片方のカプセルは海中へと沈む仕掛けとなっている。

一馬は、竜宮城で開発された秘密兵器『カー・ドローン300SL』を駆使しアジトの島を突き止める。

【300SL：ドローン構造を内蔵しているクラシックカー、陸上・飛行・水中の3モードが可能】

海中へと沈んでいた祐斗カプセルを水中モードで助けるが、アジトの構成員らに捕まり捕虜となる。

捕虜の一馬・祐斗を盾に竜宮城と駆け引きを続けようとする森田だが、一人の構成員のクーデターから解除出来ないアジトの自爆ボタンを押される。逃げ出す森田・構成員ら。車椅子に拘束されている一馬は逃げ出せない。助けに来る祐斗を抱いたレオナだが、祐斗を守り負傷する。江崎率いるU T A戦闘機軍団がアジトに突っ込み、壁を破壊したりと活躍し、一馬は祐斗を連れ戻す任務を完遂するが、レオナを失ってしま手術は無事成功し、病室には子供たちの笑い声が戻る。

(あらすじ終わり)

○ 結婚式場・中庭

太陽の下、ガーデンウェディング会場では、生田インターナショナル主催の中島政弘（23）と生田裕子（24）の結婚披露パーティーが行われている。二人の席の間には先月生まれたばかりの愛の結晶、中島祐斗（00）が眠っている。

司会者「それではここで、生田インターナショナル・未来開発室の生田正信様よりご挨拶とお祝いのお言葉をいただきたいと思います」

生田正信（24）が立ち上がると、その部下たち数名が会場の隅からベールに覆われた台車を正信の横に移動させる。

正信「政弘さん、お姉さま、祐斗くんおめでとうございます。それではご挨拶と余興を兼ねまして、生田インターナショナル・未来開発室の自信作『アランドロン』をお披露目させていただきます」

★（図-1 参照）

部下たちがベールを剥ぐと、直径2 m×厚み20 cmの円盤型乗用ドローンが現れる。

正信「このドローンの開発責任者アランの説明をお聞きください」

アラン（31）、司会者よりマイクを受け取る。

アラン「たらいま……ご紹介に……あすかりしました、アランです……このドロ」

正信、アランのたどたどしい日本語に痺れを切らしマイクを横取る。

正信「やっぱり私がお説明いたします。円周には直径50 cmのプロペラが九つ配置されており、直径1 mの中央部には幅10 cmのセンターフレームが通っています。センターフレームの左右の、この半円状プレート二枚は開閉が出来るようになっており、閉じた状態では、人が立ったまま飛行が出来ます。そして開いた状態では、センターフレームにまたがるスタイル……つまり、魔女のホーキみたいに座って乗れるのです」

アラン、魔女のホーキみたいに乗って見せる。ちらほら笑い声がする中、雪家一馬（23）、雪家智子（48）も笑みを浮かべている。隣のテーブルには警護を兼ねた松藤邦博（51）、島田 隆（32）の姿も見える。

招待客A「質問、よろしいでしょうか？」

司会者、すかさず招待客Aの席へ行きマイクを向ける。

正信「どうぞ」

招待客A「操縦はどうやって制御するのですか？」

正信「普通の質問ですね……。会話操縦と重心移動操縦、そして感情操縦の三種類を総合して行います。会話操縦では、起動・発進・上昇・下降・速く・遅くなど命令すれば周りの状況が許す限りの飛行を自動でしてくれます。例えば、『前の白い車を追え』と言えば自動認識し追尾します。重心移動操縦では、前傾姿勢を強くすれば速く前進し、後方にのけ反れば停止します。そして感情操縦では新しく開発した感情解析センサーによって、乗り手の感情、簡単に言うと声や顔の表情から感情を推測し、安全に飛行できる

ことを判断した上で、命令に従います」

招待客A「分かりました。ありがとうございます」

司会者「他にご質問等はございますでしょうか？」

招待客B「半円状プレートに取っ手みたいな孔が開いていますが何のためでしょうか？」

正信「取っ手、その通りです。これはプレートが下に開いた時に魔女のホーキみたいに座るポーズの他に、この取っ手孔を握って、つまり、アランドロンにぶら下がっても飛行が出来るということです。即ち、立ち・座り・ぶら下がりの三つのポーズで飛行が出来る夢のドローンなのです」

正信のその自信満々の説明に会場の一部から拍手が興り会場一杯の拍手に変わる。うなずきながら微笑む正信。

司会者「それでは時間の都合もございますので、この後のご質問は個別にお願いいたします。続きましてこの後は、新婦裕子さんと、祐斗くんには控え室にご移動いただき、お色直しの後、新婦入場の運びとなっております」

拍手の中、控え室へ移動する裕子と祐斗。

○ 同・控え室

祐斗を裕子の叔母が抱いている。

裕子「それじゃあ、叔母さん、祐斗をお願いします」

裕子、お色直しを済ませ会場へと向かう。

○ 同・中庭

拍手の中、入場する裕子。

× × ×

祝福の挨拶、出し物などが披露される中、額から血を流した私服警官が、よろめきながら松藤・島田のテーブルに辿り着く。

松藤「どうした――！」

私服警官「赤ちゃんが、誘拐されまし……」

気を失い倒れ込む私服警官。近くの女性客より悲鳴が上がる。松藤、控え室に向かう。

島田、警察手帳を取り出す。

島田「警察です。そのまま皆さん動かないように！ 誰か救急車手配願います」

島田に駆け寄る一馬・中島・裕子。

一馬「どうしたんです、島田さん!？」

○ 同・控え室

裕子の叔母が倒れている。

松藤「大丈夫か？ しっかりしろ！」

と叔母の上体を抱きかかえる松藤。

叔母「……」

松藤「祐斗くんは？」

叔母「若い女に……連れて……」

松藤「分かった……外傷は無いから大丈夫！」

松藤、叔母を寝かせ、中庭に戻る。

○ 同・中庭

松藤「皆さん、静かに！ 気を確かに聞いてください。……この会場の控え室で祐斗くんが誘拐されました。犯行から間もないので、ご協力お願いします」

意識を失う裕子を抱きかかえる中島。

中島「裕子、しっかりして！」

一馬「中島、俺さっき、ピザ配達のバイクを見た！」

中島「……」

× × ×

(一馬の回想)

何気なく中庭から通用道路に目をやる一馬。少し違和感のあるピザ配達の三輪バイクが会場を出てゆく。

(一馬の回想終わり)

× × ×

一馬「ヘルメットがフルフェイス、それにライダースーツだった……」

中島「えっ!？」

一馬、アランドロンに立ち乗る。

一馬「ちょっと借りるよ！ アランドロン」

一馬の『アランドロン、起動、浮上』の掛け声に反応して浮き上がる。

島田「待て、雪家！ 飲酒運転撲滅キャンペーン期間中だぞ！」

一馬「発進。通りに出て、ピザ配達の三輪バイクを見つけろ！ そして追尾！」

一馬、酒の勢いでアランドロンに命令する。

○ 沿岸道路

アランドロン「了解しました。街頭監視カメラ及び、バイクのエンジン音を手掛かりに検索します」

一馬「ちゃんと答えられるんだ!？」

アランドロン「勿論です。生田インターナショナルのA I ネットに接続していますのでお

任せください。ほぼこの方向です」

一馬「立っているのきついから、座るモードにしてくれ！」

アランドロン「了解しました」

半円状プレートがいきなり開き、一馬の股間がセンターフレームに直撃する。

一馬「ウー——痛——い——」

一馬、魔女のホーキ状態のまま悶絶する。

一馬「いきなりは、ないだろ！」

アランドロン「学習してゆくタイプなので、以後注意します」

一馬「股間事故が起こるのは、容易に想像できるだろうが——」

声を震わせ、未だ悶絶の域を脱しない一馬。

アランドロン「目的車を発見しました。ご希望の三輪バイクでしょうか？」

一馬「間違いない。このまま追尾。……ところでドロンくん、秘密兵器は何があるの？」

アランドロン「秘密兵器と申されますと？」

一馬「あれだよ、あれ！ ロケット弾とか、煙幕とか……」

アランドロン「平和利用目的で製造されていますので、そのようなものは一切ありません」

一馬「……マジですか？」

アランドロン「マジです」

一馬「何、平和こいてんだよ、中島——！」

後ろを振り返り、アランドロンの存在に気付く三輪バイクのライダー。

一馬「じゃあー、バイクに体当たりできますか？ ドロンくん！」

アランドロン「平和利用目的ですので破壊的接触は、遠慮いたします」

一馬「何ですと——!？」

スピードを上げ、逃げる三輪バイク。

一馬「分かった……バイクの上に付けてくれ……俺がどうにかする」

一馬、アランドロンの下にぶら下がる。

アランドロン「了解しました」

交差点に差し掛かる三輪バイク。

× × ×

一馬「止まれ——！」

と声を荒げるが止まらない。三輪バイクはいきなり左折する。と同時にバイクに飛び移る一馬。バイクの屋根にしがみつくもバランスを崩し転倒する。

ライダーは投げ出され倒れたまま動かない。バイクの荷物BOXの扉が開き、祐斗が入った直径60cmの透明カプセルも投げ出され転がってゆく。負傷した脚で少しだけ追う一馬。

一馬「(膝まづいた姿勢のまま、両手を口に添え大声で) ドロン！ そのカプセルを確保

しろ！」

と、100mほど転がったカプセルの上空にホバリングしているアランドロンに向かって叫ぶ。

アランドロン「無理です。ジャイロセンサーを破損しました。垂直浮上しかできません」

一馬、100m先に居るドローンの声が後ろから聞こえるので驚き振り返る。

一馬「ドロンくんとは別のドローンなの!？」

アランドロン「そのようです。私によく似ておりますが」

別のドーナツ型ドローンは、カプセルをちょうど土星のように挟み込むと浮上、一馬の上空を飛び、ライダーの横に着陸する。スピーカーから何か声が聞こえるが分からない。

★ (図-2 参照)

脚を引きずりながらライダーに近づく一馬。飛び立つドーナツ型ドローン。

一馬「こら！ 起きろ」

一馬、ライダーを仰向けにしてヘルメットを剥ぎ取る。ライダーが女性であることに驚く。

ライダー「ウー——」

ライダー、意識を取り戻し一馬に抵抗する。

一馬、ライダーに馬乗りになり首を両手でつかみ地面に押し付ける。

一馬「祐斗を返せ——」

上空に去ってゆくドーナツ型ドローンを見つめながら帰国した日を想いかえす。

× × ×

(一馬の回想)

○ 空港・滑走路

T「半月前」

着陸する旅客機。

○ 同・ロビー

二年間の英国留学を終え帰国する一馬。中島が出迎える。

中島「一馬、こっちだよ。お帰り！」

一馬「中島、ただいま！ 忙しい時に出迎えサンキュー！」

一馬、中島のボディガード兼運転手、大淵裕一(42)に気付き軽く会釈をする。

中島「マイ・ボディガード、大淵さんです」

大淵「大淵です。よろしくお願いします。荷物お持ちします」

一馬「じゃあ、すみません」

と大き目のバッグを渡す。

○ 同・駐車場

大淵、リムジンのトランクに荷物を積み込む。

一馬「相変わらずのリッチだねー、生田インターナショナルは……」

中島「どうぞ」

と車のドアを開けて一馬を手招く。

○ 車内・後部座席

一馬「ここ一年程大変だったね……」

中島「ああ、本当に大変だった。……裕子と婚約してからは、生田インターナショナルの一員としての生活に変わったからねえ」

一馬「ポストロン……だっけ!？」

★ (図-3 参照)

中島「ああ、ポストロン爆破事件が起こった時は大変だったよ……未だに犯人の目途は付いていないし……」

一馬「警察何やってんの！」

中島「警察も結構動いてくれたけど、生田インターナショナルに恨みを持つ企業は星の数ほどあるとのことで……」

一馬「今でこそ世界的企業のイメージだけど、三十年前の創業時は結構無茶してたって俺も聞いたことがある」

中島「あっ、それと忘れない内に言っておくけど、結婚式当日は身辺警護を兼ねて、警視庁より松藤さんと島田さんにも出席してもらうことになってる」

一馬「……そうなの。懐かしいな～」

中島「大淵さん、止めてください」

と車を止めさせ、窓の外を指さす。

一馬「ん、これだね、ポストロン」

中島「ちょっと降りて。……説明するよ」

一馬・中島、車を降りポストロンに近づく。

○ コンビニ脇・ポストロン前

直径 60 cm×高さ 3 m の透明の筒二本を左右に立てて、その間にジュースの自販機ほどのメインボックスを挟んだ形状をしている。二本の筒には小型ドローンが各々五機ほど段々に格納されている。左の筒が発射用、右の筒が着陸収納用になっている。

中島「このメインボックスに専用カードをかざすとこの窓が開くので、ここに送りたい物

を入れる」

中島、実際にカードをかざして一馬に説明する。

中島「大きさは、この窓に収まる範囲で、重さは1 kgまでになっている」

窓を覗き込む一馬。

中島「大きさ・重さ・非危険物をクリアすれば、後は自動でドローン中央部に格納される。格納されたことを確認してモニターから送りたい相手を選べば、相手のスマホ位置に向かって最短最速で飛行する。そして荷物を届け終わると一番近いポストロンに飛び着陸収納される」

一馬「確かに、一直線に飛ぶから、最短最速を生かしたプライベート特急便ってとこだね——」

中島、少しニッコリする。

一馬「だけど、小型ドローンだし、あまり遠くまでは行けなくない？」

中島「大丈夫。距離が長いときは、途中のポストロンに着陸して、荷物を別のドローンに自動で載せ替えて飛行する」

一馬「なるほど、リレー出来るんだね！」

中島「長距離利用のお客さんは少ないけど、どうしても急ぎで届けたい仕事の資料とかにはよく使われているよ」

一馬・中島、車に戻る。

○ 車内・後部座席

中島「大淵さん、出してください」

中島が座席のスイッチを押すと天井から大型スクリーンが下へ伸びてくる。

一馬「おぉー、大きいね！」

スクリーンが1 m程下がると生田インターナショナル関連のニュース映像が流れ始める。

中島「ポストロン事業を開始したのが一年前、そして爆破事件が半年前。ポストロン本体に爆弾が仕掛けられるのなら分かるけど、飛行中のドローンが連続多発的に爆発したから驚いたよ」

一馬「だけど、荷物の危険物チェックはするんだよね？」

中島「爆発したのは荷物じゃなくて、ドローン自体なんだ……これを見て！」

中島、スクリーンを指さす。

中島「このグラフは爆破されたドローンの飛行軌跡を平面的に表したものなんだけど、ここで少し波打ってるでしょ」

中島、波の部分の指さす。

一馬「あぁ」

中島「この波はドローンが 20 cmほど横揺れしたことを表してて、この時刻が 13 時 15 分。
こ

の 10 分後に爆発している」

一馬「……ってことは、飛行中に爆発物を仕掛けられたってことかな!？」

中島「多分そういうことでしょう。他のドローンも同じように爆発している」

一馬「犯人もドローンを飛ばし、粘着性のタイマー爆弾を発射したってことか……。犯人
ドローンの映像は映っていないの？」

中島「基本、前方と下方向しかこのドローンのカメラは写さないからね……。横や後ろから
近づかれられても分からない」

中島、スイッチを押してスクリーンを収納する。

一馬「なんか飲み物ない？」

と自分の喉に手を当てる。

中島「あ、気付かなくてごめん。ひじ掛けのタッチパネルから選んで」

一馬、ひじ掛け先端の 3 インチモニターにタッチし、レモンカナディアンを選ぶ。

一馬「(驚きながら) おおー」

一馬の前のボックスからテーブルが出てコップも出て、最後に 5 cmほどのドローンの
ミニチュア(祐斗の写真が貼ってある)が、コップの上までせり出してジュースを注
ぎ入れる。

一馬「注ぎ口が、祐斗くんが乗ったドローンってか!? 面白い!」

中島「よく見てみ! ネットデールも付いてんだよ!」

かつての中島ドローンのミニチュアになっている。顔を見合わせニンマリする。

F・OUT

(一馬の回想終わり)

× × ×

○ 沿岸道路・交差点

松藤・島田、現場に駆け付ける。一馬はライダーに馬乗りのまま固まっている。

松藤「雪家君、もういいよ」

島田「後は俺たちに任せろ!」

松藤・島田、放心状態の一馬の両手をライダーから外す。

○ 所轄警察署・取調室

ライダーが、松藤・島田から事情聴取をされている。ライダーと島田が机を挟み座っ
ている。松藤、ライダーの後ろに立っている。

島田「黙秘かよ、この野郎!」

松藤「野郎じゃないよ、島ちゃん！ ライダースーツも決まってる……美人でもある」

島田、そっぽを向く。

松藤「だけど、一言くらいしゃべってもらわんと困るんだよ……本店からわざわざ出向いてんだから……」

島田、机をたたく。ライダー、大きな音にも身動き一つせず島田を睨みつけている。

島田「仲間は何処に居るんだ？ 赤ちゃんは無事なんだろうな？」

松藤「大型のドーナツ型ドローンで連れていってるから赤ん坊は大丈夫だと思うが、これからどうするつもりだ？」

島田「ポストロン爆破事件もお前たちだな、犯人は……」

○ 同・取調室隣室

取調室の隣の部屋ではマジックミラー越しに取調べの様子を伺う副署長（59）が立っている。

副署長のM「面倒だから、早く本店に連れて行ってくんないかな～。もうすぐお昼、腹減ったなあ～」

副署長、何かいいアイデアを思い付き、ニンマリ顔でガッテンのポーズをとる。

○ 同・総務課

受付カウンターで馴染みの職員に手招きする副署長。駆け寄る職員。

副署長「(小さな声で) ウナギのせいろ、特上で4つ頼んで！」

職員「はあ～、ちょっと待ってください」

と、アドレスシートを覗き込む。

職員「あいにく今日は、柳川亭は休みです」

副署長「ほんとに～。じゃあ、しょうがない。坂田屋レストランの特Aランチでいいわ、取調室まで」

職員「経費節減週間じゃないんですか!? 副署長！」

副署長「だって本店から来てるんだよ、あのお二人、『お・も・て・な・し』しとかないと、いけないでしょ——」

職員のM「何か、裏あるよねー!? この悪代官め！」

○ 同・取調室・前通路

坂田屋レストランの配達員が特Aランチを岡持ちで運んでくる。

副署長「遅いじゃな～い」

配達員「すみません。配達中にネズミ捕りに掛かって遅くなりました……」

副署長「どこの警察だ、こんな時間に！」

あきれ顔の配達員。

配達員をよそにニコニコ顔で岡持ちを取調室に運び入れる副署長。

○ 同・取調室

副署長「失礼いたします。そろそろお昼ですのでお持ちしました」

島田「取調べ中ですよ。出てください」

副署長「休憩お入れになった方が、お仕事はかどりますって。『腹が減っては戦は出来ぬ、開く口も開かない』って言うじゃありませんか」

副署長、壁際の別の机に岡持ちを置く。ライダーの左手側に背中を向ける。

ライダー、その瞬間を逃さず副署長に飛び掛かり左手一本で首をつかみ、右手の尖った爪の人差し指を喉に突き立てる。

★ (図-4 参照)

副署長「ウゥ……」

一瞬にして人質と化す副署長。呆気にとられる松藤・島田。

副署長「た・す・けてー」

副署長、かすれた哀れな声で眼をむき松藤・島田に訴えかける。

松藤「落ち着け！ ライダー。そいつを殺しても何にもならん」

島田「そいつはどうなってもいいが、逃げたらあかん」

副署長、唇が震え白眼をむく。

ライダー、副署長を人質に取調室を出る。追う松藤・島田。

○ 同・ロビー階段

ライダー・副署長、ロビーに向かう階段を慎重に降りる。ロビーの一般女性が気付き悲鳴を上げる。

ライダーの左手の親指の爪が首に刺さり込み少し血が流れている。

大勢の人間が見守る中、階段を降り出口へと向かう。

島田「出口をふさげ——！」

島田の怒号に警官二名が立ちあはばかる。

ライダー、右手の人差し指を喉にねじ込ませる。血の筋が二本になる。

副署長「ど・い・てー・くださーい」

と悲鳴めいた声で警官に訴える。

副署長の訴えに負け、少しづつ足をにじりながら出口を開ける警官二名。

ライダー・副署長、背後に接近している松藤・島田に気付き180度反転しそのままゆっくりと玄関ロビーを出てゆく。

○ 同・玄関前

松藤から呼び出されていた一馬のオープンカーが玄関に到着し停車する。運転席から玄関ロビーを見る一馬。背中を向けたまま車に近づくライダー・副署長。

一馬「どうしたの？」

事態にまだ気づかない一馬。

副署長「ウゥ……」

ライダーのお尻が車の左ドアに当たると同時に首を掴んでいる左手を大きく右側に振り回し、副署長の軀を車のボンネットの上につ伏せに寝かせる。左手で首を押さえたまま助手席に乗り込むライダー。副署長の顔はフロントガラスの左下に押さえつけられている。血だらけの副署長と目が合う一馬。

★ (図-5 参照)

ライダー、あごを振り一馬に発進を促す。

島田「雪家、動くな——！」

一馬、島田の声をよそに車を発進させる。ボンネットに副署長を乗せたまま通りに入る。ライダーのあご振りが増しスピードを上げる一馬。

○ 街の通り

一馬「こんな形で再会ですか——」

ライダー、一馬のポケットをまさぐりスマホを取り出しナンバリングする。

一馬「大事に扱えよ！ 買ったばかりの新機種なんだから……」

ライダー「パパーパ パーパーパパ……」

と唇を速く小刻みに開閉しながら、微かな破裂音みたいな声で話す。

一馬のM「宇宙人かよ!?!……これひょっとしてモールス信号!?!」

× × ×

車は町の外れにさしかかる。パトカーのサイレンが近づいてくる。

ライダー、前方に停車しているワゴン車の後ろを指差し車を停車させた後、左手を放し、車のキーを抜き取り、勢い良くドアを開けて降りる。ボンネットから地面に落ちていた副署長の頭頂部にドアが当たる。

副署長「あ・た・まが～割れる——」

ワゴン車の後部ドアが開き、乗り込むライダー。追う一馬、ライダーの後ろからすかさず乗り込み、ライダーと仲間の男と三人でもみ合う。男に羽交い絞めされライダーのキックを食らい気が遠くなってゆく一馬。

F・OUT

○ 組織のアジト・メイン指令室

F・I N

ゆっくりと瞼を開け辺りを見回す一馬、ゆったりとした電動車椅子に手足を拘束されて座らされている。大きい半球状の天井に曲面の壁、室内なのに白く明るい部屋に目を細める。

森田「お目覚めかな？」

森田利文（57）が声をかける。

一馬、まばたきを繰り返し、正気を取り戻す。

森田「君の名は？」

一馬「雪家、雪家一馬——」

森田「私は森田。このレオナの父親だ」

一馬「ライダーの名前は、森田レオナ、か」

森田レオナ（27）、森田に向かい、わずかな声を出しながら手話で話しかける。ハツとした表情で見つめる一馬。

森田「見ての通り、この子は言葉が話せない、聞こえはするんだがね（一馬の耳輪をつまみ軽く引っ張る）。幼い時に母親を亡くし、その時以来言葉を失った。『失声症』と言うのだがね。……それから私は社会と縁を絶ち、父と娘二人だけの生活を始めた。学校には行っていないが教養はちゃんと身に付けさせている。それだけではない。空手ジークンドーをはじめ武術も身に着け、潜水技術に、機械のオペレートに、コンピューター工学まで。完璧な教育だ！ しかも私に似て美人だ！」

森田、ほくそ笑む。

一馬「それはご立派ですが、礼儀は教わってないみたいだね？」

森田、すかさず一馬の頬をはたく。

一馬「……」

一馬の顔は横を向いたままで、唇から血が滲む。組織の構成員Aが保育器に入った祐斗を専用台車で運んでくる。

一馬「祐斗——！」

森田「この子の名前は祐斗君か～、なるほど。……ところで、雪家君。ここで一つ提案があるのだが……」

一馬「……」

森田「この子を返す代わりに、私達の仲間にならないか？」

一馬「(即答で) いやだ！」

森田「じゃあ、レオナと結婚して私の右腕になってほしい」

一馬、レオナを瞬見し、しばし迷う表情を見せる。

一馬「……断る。が、祐斗は返してもらう」

森田「(笑みを浮かべて) 当たりだ！」

一馬「何が、当たり前なんだ!？」

森田「君は必ず『NO』と返事すると思っていたからね。読心術みたいなお遊びだよ。そして、もう一つ当たっていた。レオナとの結婚をチラつかせたら、案の定、返事が遅れたね」

ニヤつく森田。目を伏せる一馬。

森田「お遊びはここまでだ。雪家君、君をどうしようか？ 人質は、この子だけでいいので、死んでもらうか」

一馬、歯を食いしばり森田を睨みつける。

森田「まあ、レオナの脱出を少し手伝ってくれたことと、さっきの、返事が遅れたことに免じて許してあげよう。生きて返してやるが、生田との最初の連絡係にでもなってもらうか……」

森田、レオナを見つめる。

レオナ「ウゥ、ウー……」

と手話で森田と話す。

森田「レオナはこの子の面倒を看なさい」

レオナ、少し嫌な表情で首を横に振る。

森田「ここには女性はお前ひとりだ。何事も勉強だ！」

構成員A、レオナの前に保育器を移動させる。

一馬「ポストロンの一件もあなた達ですよね……目的は何？」

森田「我々の新規事業は五年後には世界シェアNO1になる予定だが、出来れば目の上のたん瘤は取っておきたい……」

一馬「フェアじゃないね～、技術があるのなら堂々と戦えばいいじゃん！」

森田「そんなことより、この施設を少し案内してあげよう」

森田、一馬の車椅子の後ろに回りゆっくと押し始める。通路へと向かう。

○ 同・通路

一馬「一体ここは何処なの？」

森田「それは言えんが、建物は私の設計だ」

一馬「まあ、センスは良さそうだね、明るいし広いし」

少しキョロキョロする一馬。

森田「そんなに褒めてくれるのか。ご褒美にレオナの部屋でも見せてあげようか？」

一馬「それはありがたいけど、その前にトイレ行かしてくんない？」

森田「ちょうどトイレの前だ。君はラッキーだ！」

森田、トイレルームのドア開閉ボタンを押しドアを開く。

一馬「何ですか!？」

一馬、顔をこわばらせ驚く。

そこはトイレと言うより手術室とでも言える部屋になっている。金属製のアームや江戸時代の拷問器具みたいな形状の機器も見える。

森田「このトイレは来客用だ！ 私がユーモアを込めて設計した。入った後はオートメーションで、君の排泄の手伝いをしてくれるはずだ……使ってみるのは初めてだけだね」と、車椅子の前進ボタンを押して車椅子のみトイレの中に走行させる。

一馬「大丈夫かよ!? デリケートなところをこんな機械任せに出来るの〜? 心配〜」

一馬、後ろの森田に目を潤ませながら目配せするも恐怖の中、一人でトイレの中に入ってゆく。

一馬「ついてこないのかよ!? 手足開放してよ〜」

トイレのドアが閉まる。

まず、一馬の首の高さにある幅 40 cm×厚み 3 cmの金属板二枚が両脇より首を挟む（板の先端は半円状にくり抜かれておりちょうど首が納まる）。そのまま挟んだ状態で上昇し一馬は立ち上がった状態となる。

★（図-6 参照）

次に、トイレが質問する。

トイレ「大ですか？ 小ですか？」

一馬「小です」

トイレ「了解しました」

車椅子の手の拘束のみ解除される（ひじ掛けに仕組まれた電磁石が off になり両手自由になるが鉄製の腕輪自体は手首に巻かれたまま）。

一馬「ジッパー下すけど、いいのかな？」

トイレ「どうぞ脱いでください」

一馬、ジッパー下す。

トイレ「下半身全て脱いでください」

一馬「えっ……」

ロボットアームみたいなものが脱がせようと動き始める。

一馬「分かったよ。言うとおりにします」

と、デニムとトランクスを太ももまで下す。

一馬「下ろしたよ」

金属板の下面に仕組まれた電磁石が on になり両手の腕輪が下面にくっ付き拘束される。続いて半球状の装置二個が両脇から挟み込むように一馬の腰全体を覆う。

一馬「何だよこれ？ また両手拘束かよ——。とにかく下半身は無防備なんだから丁寧に扱ってくれよ……」

トイレ「了解しました」

半球状の装置の軀と接触する部分には伸縮クッション材があり、へそから太ももまでを水漏れしないようにホールドしている。

トイレ「特殊温水注入します」

一馬「ウウ、気持ちいい！ もっと注入していいよ！」

トイレ「満水状態になりました。排泄を実行してください」

一馬「えっ、この状態で!？」

トイレ「ご心配無用です。温水は毎秒5リットルの速さで浄化循環しており衛生的です。

終了時には完全除菌も行います」

一馬、用を足し安どの表情を見せる。

一馬「終わったよ」

トイレ「そのようですね。完全除菌を行います。ちなみに、尿検査のご報告はいたしますか？」

一馬「ついでに検査までやってるの、凄い！ 報告して！」

トイレ「あなたの中性脂肪値は許容値の15%オーバー。悪玉コレステロールは許容値の21%オーバー。尿酸値は許容値の……」

一馬、『もういいよ』と報告を中断させる。

トイレ「完全除菌・乾燥終了いたしました」

半球状の装置がゆっくりと一馬の下半身から離れる。同時に拘束されていた両手が解放される。一馬、デニムとトランクスをたくり上げる。

トイレ「フルオート・トイレットX（エックス）の使い心地はいかがでしたか？」

一馬「名前、あったんだね!? 素直に気持ちよかったかな～」

トイレ「ありがとうございます。またのご使用お待ちしております」

一馬のM「……良く出来ているかも……」

首の金属板も元の状態に戻り、入った時の逆の順序でトイレのドアから後ろ向きに出てゆく車椅子。

森田「スッキリしたみたいだね」

一馬「おかげさまで……」

森田、一馬の首に絆創膏のようなものを張り付ける。一馬、目を閉じうなだれる。

森田「案内するのは、ここまでとしておこう」

F・OUT

○ 見知らぬ道端（朝）

歩道に倒れている一馬。

一馬「ああ、ここ何処だ？」

と額に手を当てきつそうな表情で辺りを見回す。横を通り過ぎた一台の軽トラックが

停車する。

運転手「大丈夫かなあ～、あんちゃん！」

と一馬のそばに駆け寄り、肩をたたく中年オヤジの大きな声が脳内で乱反射して苦しそうな一馬。

一馬「ウー、はい。どうにか～」

運転手「近くの病院でも送ってあげるわ～」

一馬、運転手に手を貸してもらい助手席に座るが、すぐにうなだれてしまう。

○ ゆう愛の家・病室205

F・I N

難病のこども支援施設『ゆう愛の家』の四人部屋の小さめのベッドで一人眠っている一馬。

看護師A「王子様は、まだお眠りだわ」

看護師B「いくら近くだったからって、うちに連れてこなくてもいいのにね～、源さん」

看護師A「だって近くに病院無いし、源さんにはいつも野菜貰ってお世話になっているし……人助けよ」

看護師B「……そうですね、人助けの精神は誰にでも平等でした！」

裕子「そうよ～、それがこの施設の……」

突然、病室に入ってきた中島裕子施設理事長に驚く看護師たち。同時にベッドに寝ている一馬に気づき驚く裕子。

裕子「誰かと思ったら、雪家君……!？」

裕子、ベッドの横にかけ寄り一馬の状態を伺う。

看護師B「理事長のお知合いですか？」

裕子「ええ、主人の親友であり私の可愛い後輩よ。それでどうなの、彼の状態は？」

看護師A「目立つ外傷などはありません。一時的な血圧の低下と脱水症状が見られましたが処置後は安定しています」

裕子「ありがとう、それはよかったわぁ」

一馬、口を少し開き呼吸を荒げながら目を開ける。

一馬「あぁあー、ここは!? ……あぁ裕子先輩い!?……」

裕子「雪家君、雪家君」

看護師A「先生呼んできて！」

看護師B、病室を出て担当医を呼びに行く。

看護師A、点滴の準備をする。

一馬、目を閉じ呼吸もまだ荒い。

看護師B、担当医を連れて戻ってくる。

担当医「心的外傷後の軽い発作のようにも見えますが、鎮静剤を打っておきましょう」

裕子「心的外傷って!？」

担当医「深刻になるような程度ではありません。例えば、想定外の経験をしたとか、未知の遭遇体験とか……その部類でしょう」

裕子「恐怖体験とかもですか？」

担当医「含まれるかもしれませんが、体力さえ回復すれば、目を覚まして元気に起き上がりますよ」

○ 同・給湯室

看護師B「205の雪家さんって、何年前にテレビであったでしょ！ ドローンで赤ちゃん助けた……」

看護師C「ええ、あの生中継の……マンション火災の……!？」

看護師B、ビスケットを方張りながらお茶で流し込む。

看護師B「ひょっとして知らなかった!? 理事長のご主人はあの時のドローンを操縦してたのよ！」

看護師C「えっ、そうなの——。わたし、テレビの前で拍手したわ！ じゃ、もう一台のドローンを雪家さんが操縦してたの!？」

看護師B「そうじゃないのよ。もう一台は犯人のドローンで、理事長たちの大学の教授か何かだったわ……」

看護師C「ふーん……」

看護師長が二人を覗き込む。

看護師長「いつまでここに居るの？」

看護師B「ハイ、お茶です！」

看護師B、とっさに飲みかけのお茶を差し出す。

看護師長「後で205に行ってくださいね！」

看護師B・C、口をモグモグさせながら大きく頷く。

○ 同・病室205（夕）

そのまま付き添っていた裕子の元に中島が駆け寄る。

裕子「あっ、あなた」

中島「一馬、一馬……」

裕子「まだ安静にしておかないと……」

裕子、一馬の肩をつかんでいる中島の手に自分の手を重ねる。

軽くお辞儀をして看護師B・Cが入ってくる。

看護師B「お疲れ様です。定期測定いたします」

中島「お願いします」

血圧等の測定を始める看護師ら。

× × ×

一馬「あ、あ、ああ、ウーウ」

中島「一馬！」

一馬、わずかに首を振りながら目を覚ます。

裕子「雪家君！」

中島「一馬、目覚めたね！ おはよう……夕方だけど……」

看護師ら、測定の手を止める。

一馬「俺、寝てたのかな!? 夢見てたのかな!？」

と、かすれ声で中島と裕子に尋ねる。次の瞬間我に返る一馬。

一馬「あ——祐斗、祐斗大丈夫——元気である——」

裕子「ほんとに、雪家君！」

中島「ほんとか、一馬！」

安どの表情の二人。

一馬の右手を中島の左手が、一馬の左手を裕子の右手が、中島の右手を裕子の左手が握り合って喜び合う。

看護師B「良かったですね——」

看護師ら、笑顔で小さく拍手をしている。

一馬の腹が鳴る。一同、笑う。

一馬「腹減ったかなあ〜」

看護師C「只今、食事、お持ちします」

○ 警視庁捜査一課・取調室

副署長が、松藤・島田から事情聴取をされている。

松藤「ちゃんと思い出してくれれば、わざわざ所轄から来てもらわなくても良かったんですけどね……」

島田「副署長、広い意味で言うと、あなたにも疑いかかっているんですよ！」

副署長「私があの子の逃走に手を貸したということですか!？」

松藤、お茶をすする。

島田「だって、あなたさえ取調室に入ってこなければ、こういう事態にはなっていないんだから——」

副署長「だって、お昼だったし、お腹空いてたし……」

松藤「逃走の一件は、察知できなかった我々にも非があるが、きっかけを作ったのはあなただ！ しっかり協力してもらわないと困るんですよ」

島田「雪家の車のボンネットに乗せられた後、雪家と女のやり取りはどうだったの？」

副署長「……たぶん……ちょっとだけ……」

島田「ちょっとだけ、何？」

副署長「(とぼけ顔で) ちょっとだけ……フレンドリーな感じだったかなあ～」

島田「やっぱり、雪家とあの女、どこかで繋がってんじゃないですか～松っあん！」

松藤、副署長のお茶を入れなおし机の上に置く。

副署長「そ、そうですね……あの二人出来てますよ、たぶん」

島田「憶測で調子いいこと言ってんじゃないよ～。まあ、確かにあのタイミングで玄関に車横付けもないけどなー」

松藤「あの時の雪家君は、私が呼びつけていたので、あのタイミングも説明はつくんだけどねー。話を訊きたくても女と一緒に居なくなったあ——」

天井を見上げる一同。

島田「雪家——何処だ——」

松藤の携帯が鳴る。

○ ゆう愛の家・病室205

すっかり回復した一馬と裕子が談笑している。

裕子「この施設はね、あなた達がドローンで赤ちゃん救助した時から、いろいろ考え始めたのがきっかけで、できたのよ」

一馬「そうなんですか！」

裕子「私達って、みんな理系だったでしょ！ 赤ちゃんとか子供とか、視野に全く無くて。女性として何か淋しく感じたのよ……」

一馬「先輩にも、そんな一面が……」

裕子「酷いわね！ これでもれっきとした女性であり母親でもあるのよ——」

一馬「それは失礼しました」

裕子、一馬に顔を覗かれないように窓際へ移動し外を眺める。

裕子「ほんとはね、政弘さんと付き合い始めてから変わったのかもしれない……」

一馬「……」

裕子「あの人、優しいのよ、私にも、誰にでも……」

一馬「そうですね……」

裕子「三年前、私が交換条件として『交際』を提案した時もニコニコして受け入れてくれたの。あの頃、結構いかついリケジョの先輩だったのに……」

一馬、口元のみで笑う。

裕子「実はあの交換条件を出したのは、ほんのお遊びだったの」

一馬、『えっ』と声にならない。

裕子「あの頃、自分の研究が行き詰まっていた、むしゃくしゃしてて、意地悪したのよ……それをあの人は気付いていながら受け入れてくれた。その時から自分も優しく変われるような気がして、この人とちゃんとお付き合いしてみようと思って……」

一馬「いま、本当の姿になったんですよ！」

裕子「本当の……」

一馬「だって裕子先輩の名前、『優しい子』じゃないですかー」

裕子、一馬の方を振り返って笑いながら、少し潤んだ瞳を右手の人差し指で隠す。

裕子「私の『裕』の字は、『優しい』の『優』の字じゃないわよ……」

一馬「あれ、そうでしたっけ、すみません！ 名前とか漢字とか憶えるのが苦手で……。でも、まあちょっと弱弱しいところもあるけど、中島はいい奴です」

裕子「弱弱しくなんかいいわよ！ 彼のお陰で女性に戻れた気がするわ……」

一馬「あー、それはお熱いことで……」

二人、顔を見合わせ笑う。

裕子「話が完全に反れちゃったわね！」

一馬「そうですけど、なんか分かった気がします、この施設ができたことも……」

裕子「……」

一馬「母性が造ったんですよ。この施設は」

裕子「母性……」

一馬「祐斗は……、祐斗は俺と中島が必ず連れ戻しますから！」

裕子「はい……おねがいします」

× × ×

病室の入り口からオモチャのドローンが入ってくる。ゆっくりと一馬の目の前まで移動しホバリングする。

裕子「ハル君かなあ〜」

一馬、目の前のドローンを親指と中指で上下で挟む。

裕子「ハル君、入って来なさい！」

廊下に居た大橋晴久（8）が姿を見せ送信機片手に入ってくる。

裕子「この子は202の大橋結日（11）ちゃんの弟で晴久君、小学二年生」

一馬「こんにちは——」

晴久「(小さな声で) こんにちは」

一馬「何か元気ないね!？」

晴久、一馬に向かって黙って手の平を差し出す。

一馬「カメラも付いてていいドローンだね！」

と晴久にドローンを返す。

裕子「ハル君。もっと笑顔で！」

晴久「だって、おねえちゃん、しずつするとき、痛いと思うんだけど」

裕子「ハル君、大丈夫よ。お姉ちゃんはちょっとだけ手術室に入って悪いところを良くするだけだから……」

晴久、軽くうなずいて出てゆく。

裕子「結日ちゃんはハル君の二つ上でね、移植手術しか手立てがなくて……ドナー待ちの状態なの……子供の支援施設って言っても、病院でしょ、みんなここに来るときは表情が重くて……」

一馬「……」

裕子「だからね、せめて窓からの景色だけは明るい所にしたくて……」

一馬「そうですね。確かに都市部からは離れているけど、海が見えていい場所です」

一馬、窓の外へ視線を移動する。その視線が海の上空へと移動し続け、そのまま組織のアジト（離島）のアングルに移る。

○ 組織のアジト・レオナの部屋

レオナ、眠っている祐斗をそっと抱き上げおでこにおでこを当て、笑顔を見せる。

レオナ「ウ、ウー、ウー……」

育児の要領を得た感のレオナは手際よくベビーカーに載せ、森田が居るメイン指令室へと向かう。

○ 同・メイン指令室

森田が構成員らに指示をしている中、レオナがベビーカーを押し入ってくる。急に泣き始める祐斗。

森田、怪訝そうな表情を見せる。

森田「五月蠅い！」

レオナ、祐斗を抱きかかえ、出ない声を絞り出して笑顔であやす。

森田「大きな声を出して、すまない」

祐斗泣き止み、ベビーカーに戻すレオナ。

レオナ「ウーウー、ウーウー……」

手話を交え森田に何か訴えるレオナ。

森田「えっ、……」

頭をひねる森田。

森田「この赤子を連れて、そんなに買い物かしたいのか!？」

さらに目で訴えるレオナ。

森田「本土のショッピングモール……手話のできる店員がいる店か？」

レオナ、頷く。

森田「分かった。レオナ。お前も考えたら年頃の娘だ、親戚の赤子をちょっとだけ預かっていることにすれば、いいか……」

レオナ、口元で笑い、小刻みに頷く。

森田「ただし、ボディガードを同行させる。そして、決して、目立たないことだ！」
と、レオナの顔の前で人差し指を立てて忠告する。

レオナ、ベビーカーの祐斗に軽く頬ずりをし、出てゆく。

× × ×

森田、構成員Bにボディガードを命じる。

構成員B、『了解しました』と答えるも少し重い表情を見せる。

森田「何だ？」

構成員B「大丈夫でしょうか、レオナ様。結構育児を楽しんでいらっしゃるのでは!？」

森田「……」

構成員B「この後の計画に支障が出なければよいのですが……」

○ ゆう愛の家・屋上

一馬・中島、エレベーターを降りる。

一馬「うわー！ ここからの海の眺め、最高だな！」

中島「だろうー。俺のリセットの場所だよ」

ヘリポートのマーク『H』の文字の横棒に一回り小さい『D』の文字が重なっている。

一馬「何これ？ HにDって……」

中島「もちろん、ドローンのDだよ」

一馬「あぁ」

中島「医療用ポストロンの離発着場でもあるんだ。普通のポストロンでは運べない少し大きい医療品や、急を要する物を運んだりしている。三ヶ月前には、初めて臓器移植のための臓器を運んだんだよ！ 普通、臓器の運搬は専任の担当者が専用容器に格納の上、一般交通機関を使うんだけど、急な事態になってクールドローンを三機リレーしてこの位置まで運んだんだ」

一馬「凄いなー、今はそんなことになってるんだ!？」

中島「ちょっとそのDの文字の上に立ってみなよ！」

一馬、Dの上に移動する。中島、笑いながらスマホを操作する。

一馬「あっ、びっくりしたー」

Dの文字の中心部(直径2m程)がエレベーターになっていて下の階に下がってゆく。

中島も後から飛び乗り一緒に降りてゆく。

○ 同・Dのエレベーター内

中島、スマホを操作しながら一馬に説明をする。

中島「このDのエレベーターで下りてきたドローンは、この四階あるいは手術室のある三階で荷物を下ろすけど、俺たちはもっと下まで行くよ」

エレベーター内は、ほぼ真っ暗となる。

一馬「中島、横にも動いてないかい!？」

中島「そう、横にも動いているし、平面的に90度回転もしている」

一馬「3Dエレベーターってこと!？」

中島「俺のこだわりだよ！」

一馬「変なところにこだわるなヨ！俺が閉所恐怖症って知ってるよなあ!？」

少し冷たい空気を足元に感じる一馬。

中島「そろそろ着きますヨ、竜宮城に——」

一馬「可愛い子でも待ってるの!？」

エレベーターが停止すると、エレベーターの音声の中島に報告をする。

エレベーター「新規対象、オールクリアー、です」

一馬「何だよそれ!？」

中島「初めてこのエレベーターに乗る対象人物のデータをスキャンして、このまま入場して良いかをAI判断させている」

一馬「恐怖に慄く中、勝手にスキャンされてたってか——!？」

ドアが開く。思いのほか広い地下空間が広がる。一馬の目が慣れると目の前には島田警部補がニコニコ顔で立っている。

島田「竜宮城へようこそ！ 雪家君」

と右手を出して一馬に握手を求める。

一馬、反射的に右手を出して島田と握手する。

島田、左手に隠し持っていた手錠を一馬の右手にかける。

一馬「えっ、え——!？」

島田「君には逃亡ほう助の容疑が掛かっている。分るよなー」

一馬「何ですとー」

○ 竜宮城・中央指令室

天井の低いホール並みの広さに二十名ほどの人員が情報処理・プログラム管理等の作業をしている。中央に情報を一望できる中央モニターが設置されている。

一馬「島田刑事が居るってことは……ここって警察機関の中央指令室か何かの出先機関、なの!？」

中島「正式名称：生田インターナショナルNO7、通称：I I 7、愛称：ダブルアイセブン」

一馬「ダブルオーセブンなら聞いたことあるけど……」

島田、一馬、中島、の順列で奥の別室へと歩いてゆく。

一馬「えっ、じゃあ『竜宮城』って何？」

島田「竜宮城は、ニックネームだ」

一馬「ええー。整理すると、正式名称が生田インターナショナルNO7で、通称がI I 7で、愛称がダブル愛セブンで、ニックネームが竜宮城。つまり別名が三つもあるって、『バカ』じゃないの？」

島田「馬鹿とはなんだ！ ちなみにI I 7を1 1 7クーペ、それを略してクーペと呼ぶ奴もいるんだぞ！」

一馬「それって日本の名車だし、『クーペ』って原型とどめて無いし……四つも五つもあるって完璧『バカ』でしょ！」

島田「考えが浅いな一雪家君！ 数が多い方が、『特定されにくい』という利点もあるのだよ」

一馬「あっ、そうかー、うーん、なるほど。って、やっぱりよく分かんないよ……」

○ 同・別室A

ミーティングルームなりの休憩室。三人のみで他に人は居ない。無料で飲めるドリンクバーと、有料の自動販売機がある。

島田「まあ座ってくれ」

一馬、手錠したまま座る。

一馬「何で島田さん、ここに居るんですか？」

中島「一馬、三年前の俺たちの活躍がきっかけで警視庁内にドローンを活用した軽犯罪ドローン対策課が設置されたろ！」

一馬「ああ」

中島「だけど、思ったより雑用係的な仕事が増えたため、表面上の対策課とは別に、重要事件に対応するもう一つの対策課を秘密裏に設置する運びになったわけ……」

一馬「ひょっとして裏の対策課の課長さん!？」

島田「……その通りだよ。警部補でもある」

一馬「(小笑いしながら大袈裟に) 大出世じゃないですか!？」

島田「笑いながら言ううな！」

一馬「じゃあ、松藤さんもここで一緒なの？」

島田「松っあんは警視庁と、こことを結ぶパイプ役であり、時には指令役でもある」

一馬「さすが、松っあん！ 指令役って警部補よりカッコイイですね！」

島田「お前まで『松っあん』って呼ぶな！」

中島、ドリンクバーで紙コップを三つ用意する。

島田「あっ、俺はこっちいただくよ」

と有料の自動販売機を指さす。

一馬「ドリンクバーでいいじゃない!? タダなんだし……」

島田「私は、君達の友人である前に、(一馬・中島が島田をパッと見る) 公務員であるので、ケジメは付けておかんと。自販機でいただく」

一馬・中島「……」

島田「それに最近、これ気に入ってるんだよ」

と自販機のレモンイグレスィアス(コーヒー味)を指さす。

一馬「レモンイグレスィアスのコーヒー味!? 他の缶コーヒーでいいんじゃないの!」

島田「雪家君、このコーヒー味は……大人にしか解らない味なんだよ」

中島、二人分のコーヒーをテーブルに置く。島田、得意げにコインを投入しレモンイグレスィアス(コーヒー味)を買う。各々飲み始める三人。

中島「それで、この地下施設は……」

島田、「辛ーい」と舌を出し、中島の話を見断する。

中島「(笑いながら) やっと当たりましたね! 島田さん」

島田「あぁぁー」

一馬「だって、コーヒー味でしょ!? 四川風なの!? 今だに流行ってんの?」

中島「ジョーク商品のブームは去ったけど、今でも、百本に一本の割合で入ってるんだって『四川風』……たしか、ニセ成分表の下に『ここを削る』ってあるでしょ」

一馬、島田の缶を手に取り見る。10円玉を取り出し削る。

一馬「あっ、本当の成分表が出てきた!」

中島「唐辛子エキスの量が半端なく多いはず!」

一馬「なーるほど」

島田「『なーるほど』じゃねえよ〜」

と一馬の手から缶を奪い取り成分表を覗みつける。

一馬「島田さん、知らなかったんですか? (薄ら笑い気味に右手人差し指を立てて) イグレスィアスのポリシーは引き継がれているんですよ! コーヒー味にも」

中島「根強いファンがいるみたいで、今では激辛と分かった上で飲み干すのが『男の証』になっているんですよ!」

と島田を見る。

一馬「へえー、おもしろい。島田さんって男の中の男ですよねぇ!」

目を泳がす島田。

○ 組織のアジト・メイン指令室

森田・構成員B、ショッピングモールへ行くレオナの服装等のチェックをしている。

控えめのメイクに帽子、サングラス、マスクをしているレオナ。

森田「いいだろう」

構成員BのM「逆に目立たないか〜!？」

ベビーカーの祐斗、急に泣き始める。

森田、怪訝そうな表情を見せる。

森田「注意して行って来なさい」

レオナ、祐斗を抱きかかえ、あやす。

森田「後は頼んだ」

と構成員Bに眼を向ける。

× × ×

構成員B、ゆっくりと深く頷く。

× × ×

レオナ、泣き止んだ祐斗をベビーカーに戻し、手話で『ありがとう』と森田に伝え、ベビーカーを押し構成員Bと共に出てゆく。横目で見送る森田。

○ ショッピングモール

多くのテナント店が入った二階の通路をベビーカーを押しながら祐斗と一緒にウインドウショッピングを楽しむレオナ。10m程後ろを歩く構成員B。

構成員BのM「帽子、サングラス、マスクをしてもスタイル良すぎて、やっぱり目立つなあー、レオナ様は……」

レオナ、手話のできるショップ店員のいる服飾と雑貨の店へ入る。

店員、レオナとすぐに気づかない。

レオナ、帽子を取り髪を広げ、サングラス、マスクも外す。

構成員BのM「それは一いけないです、レオナ様……」

店内の客が皆振り返る。

店員「あっ、レオちゃんだったのー」

レオナ、はにかんだ顔を見せる。

店員「ベビーカー押してるから、分かんなかったー」

レオナ、手話で親戚の赤ちゃんを預かっていると伝える。

店員「そーなのー、意外とお似合いよ！」

店員、他の客もうまくあしらいながら、レオナとの手話会話を楽しむ。

構成員B、レオナに接近し、げんこつで口を隠して咳払いをする。

レオナ、少しだけ声を出し睨む。

構成員B「(低い声で)レオナ様、過ぎまする〜！」

と店員が他の客に付いている隙を狙って背中越しにレオナに忠告する。

× × ×

店内の客数が少し減る。

店員「こっちに座りなさいよ」

とレオナを奥のソファに座らせる。

レオナ、店員に祐斗の服と自分の服の相談をする。

店員「祐斗くんにはこの服とこのオモチャがいいわね！ そしてレオちゃんには最新モードはどうか～と」

レオナ、店員が集めてきたものをテーブルの上に並べ、普通の女の子と同じ表情であれこれと悩む。

× × ×

買い物を済ませ、そのほとんどを構成員Bに持たせるレオナ。店先まで見送る店員。

店員のM「この敵つい男性、お連れさんだったのね」

構成員B「早く、サングラスとマスクしてください！」

レオナ、ポケットからマスクを取り出し耳にかける。サングラスを探すが見つからない。

構成員B「祐斗君ですよ！」

レオナ、祐斗にオモチャ代わりに与えていたのを思い出す。ベビーカーの横にしゃがみ込んだ時、反対側の通路にいる所轄警察署の受付係、佐藤美佑（25）と一瞬目が合う。美佑は非番を利用して友人とショッピングをしている途中、店内にいたレオナに気づき、上司にスマホで連絡をしている。

レオナ「ウウツ」

× × ×

（フラッシュ）

所轄警察署から逃亡時の玄関ロビー。

× × ×

（フラッシュ）

玄関ロビー受付の美佑の顔。

× × ×

レオナ、慌ててサングラスをかけ、横目で美佑を見ながら出口へと向かう。追いかける構成員B。

○ 竜宮城・中央指令室

アナウンス「所轄より逃亡女性発見の通知あり。場所は、小田原市××ショッピングモール。繰り返す、所轄より……」

一瞬にして緊張を増す竜宮城。中央モニターに地図とショッピングモールの防犯カメ

ラの映像が映し出される。

中島「一番近いポストロンからドローンを飛ばして！」

城員A「了解しました！」

現場に一番近いポストロンから一機の空荷のドローンが発射される。

城員B「只今、垂直上昇中、高度100m、オートモードで現場へ直行します」

城員C「所轄より入電。音声のみで繋がります」

マイクを島田に渡す城員C。

所轄課長「車両三台にて現場に向かわせておりますが、よろしいですよ？」

島田「ちょっと待て……それはダメだ！」

所轄課長「ちゃんと、確保させます！」

島田「いや違う。そうじゃなくて……アジトまで泳がせるんだ！」

所轄課長「すでに、こちらの動きにも気付いているかも知れませんよ!？」

島田「気付かれた時は、気付かれた時だ。ドローンで追跡をさせるので、警戒されないように待機してほしいんだが……」

所轄課長「……了解しました。途中で待機させます。追跡必要時は命令をお願いします」

島田「ありがとう！」

城員B「あと一分で現场上空に位置します」

城員A「マルタイの姿、捉えました！ モニターします」

中央モニターに映し出される駐車場へ向かうレオナ・ベビーカー・構成員B。

一馬「レオナだ……」

中島「祐斗……」

一馬「後ろの男も仲間かな!？」

島田「荷物持ちのボディガードってところだな！」

城員B「間もなく到着します。オートモードを終了し、ミスターによるマニュアル操縦に切り替えます」

一馬「ミスター!？」

中島「ミスターEだよ」

一馬「ミスターE??」

島田「ミスターE、略してミスターってこと」

モニターの画像の上に『お久しぶり、雪家君』と大きくタイプされた文字が浮かび上がる。

一馬「えっ、何かのドッキリ？ この状況で……」

続いて、『犯人江崎です』と浮かび上がる。

一馬「えっ、Eって江崎？ マジですか!？」

モニターの最前列に座っている江崎和彦（30）が10m後方の一馬の方を振り向く。眼

鏡をかけ、髪型は七三にしている。

中島「詳しい話は後で……」

ミスター「マニュアル引き継ぎます。バックアップフォローお願いします」

一馬、驚きのあまり我を忘れて江崎の後頭部をガン見する。

ミスター「Eドローン、手前のビル屋上で待機します」

Eドローン（江崎操縦のドローン）は手前のビル屋上に着陸しバッテリーの消耗を抑える。

城員A「マルチ、屋上パーキングより車に乗り込みます」

城員D「車両のナンバープレート照合しましたが該当車両無し。偽造ナンバーです」

× × ×

城員A「マルチ車両、県道××号、南下します」

ミスター「Eドローン、発進します」

Eドローン、ゆっくりと上昇後、マルチ車両方向へ飛行を始める。

ミスター「マルチ車両、捕捉」

モニターに走行中のマルチ車両の後ろ姿が映し出される。

島田「もっとズームアップ出来ないか？」

城員B「ポストロンのカメラですので制限があります。これ以上は無理です」

島田「もっと近づけないの？ ミスター」

ミスター「これ以上近づいたら気付かれますよ！ 島田警部補」

神妙な表情で状況を見守る一馬・中島。

× × ×

城員A「進行方向2km先に未確認飛行物体あり、五機、接近して来ます」

城員D「飛行物体の映像、定点カメラから拾いました。モニターに出します」

場内から驚きの声上がる。

島田「これって『ウタ』じゃないか!? ミスター、呼んでたの？」

ミスター「呼んでいません！ 似てますが、これは『ウタ』ではありません」

× × ×

島田、マイクを握り所轄の課長に連絡を取る。

島田「現在マルチ車両、県道××号、平坂辺りだが、追跡願いたい！」

所轄課長「了解しました。ただし離れましたので、私から他の所轄にも応援要請をします」

島田「すまない。頼む」

城員B「所轄の担当者へマルチ情報、転送中です」

× × ×

一馬「ウタって何？」

中島「後で説明するけど、大まかに言うとドローンの別形状タイプ。戦闘機なんかの……」

島田「警戒せよ！ こいつらは敵のウタだ！ テキウタだ！」

モニターにEドローンをロケット弾で攻撃するテキウタが映る。

ミスター「このドローンでは対抗できません。このままでは追跡が……」

Eドローン、テキウタのロケット弾に被弾する。

ミスターのM「ウタを呼んでおけばよかった」

城員A「Eドローン、レーダーより消えました」

× × ×

城員C「所轄より入電」

所轄課長「うちを含め三ヶ所の所轄より急行させましたが、マルチ車両、発見できません……」

島田「申し訳ない。私の指示ミスだ」

と下を向く。

中島「追跡は断念しますが、テキウタに関する情報整理、並びに分析をお願いします」

中島、大きな声で城員に指示を出した後、一馬・島田・江崎を別室Aへ集める。

○ 同・別室A

四人、テーブルを囲み椅子に掛ける。

中島「島田さん、しょうがありませんよ。ポストロンのドローンでは戦闘は無理です」

島田、小さく頷く。

ミスター「急な事態の割には、対応できた方だと思いますけど……」

一馬「そうだよー、くよくよ顔の島田さんって似合いませんよ！ 元気出して！」

中島、祐斗を取り戻せなかったことに視線を落とす。

一馬「祐斗は俺が探し出す！ 心配するな、中島」

と中島を気遣い肩をたたく。

ミスター、四人分のお茶をテーブルに置く。

× × ×

中島「一馬、後ろの壁を見て！」

と壁を指さす。

一馬、振り返る。中島、スマホを操作する。照明が暗くなり、壁に50インチほどの映像が浮かび上がる。

中島「いろいろ説明しておくね」

四人、共に壁側に向く。

中島「まず、ミスターについてだけど、ご存知、昔は『犯人江崎』。今では警視庁の外部機関、この竜宮城の特任パイロットの業務に就いてもらっている」

壁には、江崎の過去の資料から現在の業務状態についての映像が流れている。

ミスター「雪家君、三年前は本当に悪かった。この通り謝る」

と一馬に頭を下げるミスター。

ミスター「俺は竜宮城に拾ってもらった……三年前の自分とは決別できたと思っている。

罪の償いの続きを、この竜宮城でさせてもらうつもりだ」

一馬「分かりました。よろしくお願いします」

ミスター、再度頭を下げる。

中島「次に、ウタについてだが、ウタ、ユニバーサル・トランス・オートシステム、頭文字で、U T A」

中島、スマホを操作し、U T Aの資料映像を流す。

一馬「えっ、暴走族、関係!？」

暴走族の走行映像が流れる。

中島「もうすぐ出てくるから……これだよ」

暴走族を上空から捉えた映像に切り替わり、その後ロケット弾の砲撃を受ける映像へと切り替わる。

一馬「おお、ドローンに、派手にヤラレテいるね。族が可哀そうなくらい……」

中島「ドローンじゃないんだよ！ 一馬」

一馬「えっ」

ロケット弾を発射する数機の戦闘機の映像に切り替わる。

一馬「えっ、戦闘機じゃホバリング出来ないし機動性悪いんじゃないの!? って言うか、何で戦闘機なの？」

中島「それは三年前、森先生と、俺達もだけど、ドローンを遠距離操縦できるようにしたでしょう」

一馬「確かに、スマホと送信機を繋ぐのも大変だったけど、通信のタイムラグを補正するプログラムを組むのに非常に高度な発想が必要だった。それを森先生と俺達、共に同じようなプログラムを書けていた……あれは奇跡だよ」

中島「そう。そして、その二年後、そのプログラムシステムを改良し、U T Aとして生田インターナショナルから一時期販売した。あくまで業務用の遠隔操作用として色々な工作車両・工作機械などに使用されるようにと……」

島田「しかし、別の使い方をする者も現れ始めた。業務用ではなく、自分のオモチャに組み込み始めたんだ。ラジコン愛好家だよ」

ミスター「最初は、自分の部屋からラジコン飛行機やヘリコプターや車なんか操縦出来て楽しいだけだったと思うんだけど、その内、テレビゲームの実写版の位置づけで、河川敷や海岸沿いの場所でラジコン同士を対戦させるようになったんだ。全長2, 3 mの機体にロケット弾を積んで」

島田「そこまではまだ良かったんだが……」

ミスター「やはり、人間を的にしたくなるんだろうね？ 人間というのは……」

中島「それで再び、族が的にされるわけで」

一馬「族が的なら社会は許すだろうってか」

島田「族による騒音被害が減ったのは事実だが、族にも人権というものがある。負傷者が
出る。警察は放置できない」

中島「そこでミスターの知名度を利用してU T A ラジコン愛好家を根気よく一人ずつ仲間
にしていった」

一馬「悪いけど、前科者でしょ!？」

島田「そうなんだが、ラジコン愛好家からは、神の指を持つ者として崇拜されている」

一馬「そうでしたね——。中島も崇拜してたっけ!?!……」

島田、お茶を飲み干す。

中島「今ではミスターが束ねるU T A ラジコン愛好家は約100名、U T A 保有者数の約
一割。少ないと感じるだろうけど、結構な抑止力になっているし、ミスターの一声で緊
急出動もしてくれる」

一馬「スクランブル発進ってことか……偉くなったんだねー、ミスターは!？」

と横目でミスターを見る。

ミスター、お茶を飲み干す。

○ 組織のアジト・メイン指令室

戻ってきたレオナと構成員Bを前に怒りをあらわにする森田。

森田「お前が付いて居ながら、どういうことだ！」

と構成員Bの頬をはたく。

森田「たまたま追跡してきたのが小型ドローン一機だけだったからよかったものの……」

森田、ベビーカーの祐斗の頬を親指と中指で挟む。心配そうに見るレオナ。

森田「……我が組織のU T A 戦闘機は生田インターナショナルの物を更に改造したハイブ
リッドのハイスペック。(含み笑いで) 仮に敵機が多くても、負ける気はせんのだ
がね……」

ベビーカーの祐斗、泣き始める。

森田、怪訝そうな表情を見せる。

森田「早く連れてゆけ！」

レオナ、ベビーカーを押し自室へ向かう。

○ 同・レオナの部屋

ベビーカーから泣き止んだ祐斗を抱きかかえ、おでこにキスをするレオナ。

レオナ「ウーア、ウー、アーウ」
と祐斗に話しかける。
祐斗、にっこりと笑っている。

○ 竜宮城・会議室

トラック形状のデスク上の乾いたLEDライトのみの薄暗い室内で、立花謙吉管理官(32)を上座に、松藤、島田、一馬、中島と座っている。

一馬「暗くないですか？ この部屋!？」

立花「これ位の明るさの方が、会議の重みが出るだろう」

一馬「顔がよく見えないんですけど、おたく、誰ですか？」

松藤「(咳払いしながら) こちらは立花管理官だ。我らの上で指揮を執ってもらっている」

一馬「松っあんが一番上じゃないんだ!？」

島田「管理官の話聞け！ 雪家」

一馬「ハイ」

立花「雪家君。立花だ。以後よろしく」

一馬、軽くお辞儀をする。

立花「この『クーペ』は……。あっ『竜宮城』の方が良かったかな」

一馬のM「クーペって、管理官が使ってんだ——」

立花「この竜宮城は、ゆう愛の家というホスピタルにカムフラージュされた、言わば隠れた要塞だ。要塞自体は生田インターナショナルの一部だが、その指令系統は警視庁が統治している。警視庁副總監をTOPに、私、そして松藤・島田両警部、警部補、この竜宮城の実態を知る警察関係者は少ない。裏で動きやすいようにと、わざと少なくしている」

立花、一馬の顔を覗き込む。

立花「雪家君、君は三年前の事件を初めとして、なにかと警察と接点を持っている」

一馬「いや、好きでそうなった訳じゃないけど、結果的には、そうですね」

立花「もう一度説明しておくが、この竜宮城は『裏の警察』だ。つまり、表の警察では行動できない分をカバーする。ある意味、何でもありだ!」

一馬「まあ、それは何となく分かりますけど……」

立花「いくら特殊機材を開発しても、前線で使う者が居なければ、宝の持ち腐れだ」

島田「そこで君を使おうかな～、という話が湧きに湧いてね」

一馬「『ウジ虫が湧く』みたいに言わないでくださいよ」

島田、舌をペロッと出し、すまし顔を定める。

中島「どうだ一馬、一緒に仕事をしない？ 今、別に当てはないんだよね？」

一馬「帰国後は少し遊んでから就活かな～とは思っていたよ～」

中島「じゃあ、いいよね？」

一馬「でも一、島田刑事と一緒に職場って一どうなんだろう!？」

島田、口を開き、『ハァー』と一馬を睨みつける。

中島「島田さんは主に内勤、一馬は外で活躍してもらうことになる……『特殊工作員』ということで」

一馬「特殊工作員って、スパイ的な……」

× × ×

松藤「雪家君、君には悪に対抗しようとする正義心が溢れていると思う。三年前の事件にも勇敢に向かって行った」

島田「確かに、警察より警察してたな～」

一馬「ふつう誰だって悪を見たら対抗するんじゃないですか……俺も普通ですよ」

松藤「普通じゃないよ、君は」

一馬「……!？」

松藤「『無意識に』、なんだよ。君は無意識に——悪に立ち向かってるんだよ！」

一馬「無意識!？」

島田「まあ無意識も才能の内だ。だから、推薦している。私と松っあんは……」

× × ×

一馬「……じゃあー、バイトで！」

『バイトで』と口を揃えて動かし、一馬を睨む一同。

一馬「アルバイトのスパイなんて、あんまり聞かないでしょ！ 面白いんじゃない！」

立花「まあそれでいいだろう。その方が首を切りやすい！」

立花、部屋を後にする。

× × ×

一馬「立花さんて、厳しそう。たしか、島田さんと同期と聞いてたような？」

島田「そうだ。同期なのに随分偉くなっちゃったよ……」

一馬「ジェラシーとかないの!？」

島田「あいつの警察官としての才能というか嗅覚は、ズバ抜けている。それを認めることが出来たから、今は何の嫉妬も劣等感も抱かなくていいようになったよ」

松藤「警察も能力社会。能力のある奴が当然、上に行く。いや、行ってくれないと困るんだ。それに気づいたんだよ。島ちゃんは」

一馬「大人になりましたね～島田さん！ そんな島田さん好き、ですよ！」

と島田の片腕に抱き着く。

島田「この野郎、ふざけるな！」

○ 同・研究室

体育館ほどの室内に、特殊工作機械・実験装置などが幾つも並び、二十名ほどの研究者・開発員が特殊アイテムを造り出している。

エアシャワーを浴びた後、室内に入る一馬と中島。

正信「雪家」

一馬「せんばーい。ここに居たんですか。すごいですねーここ！」

正信「だろうー！」

一馬「ハイ」

正信、少し笑顔の後、一馬の視線を誘うように室内全体に目を広げる。

正信「えっ、ちょっと待てよ。ここに入って来たということは……特殊工作員って、雪家か!？」

中島「そうです。正信さん」

一馬「バイトですけど、よろしく先輩！」

正信「えっ、バイトで!？」

一馬「バイトですが、グッジョブしますから助けてくださいね。先輩の秘密兵器で！」

中島、室内奥へ向かう。

一馬、その方向を興味深く見て、何かを発見する。

一馬「すっげー！ 300SLじゃーん！」

中島「そう、メルセデスベンツ300SL、ガルウイング。一馬の好きなクラシックカー……だね」

★ (図-7 参照)

一馬「何で、ここにあるの？」

正信とアランが近づいてくる。

アラン「お久しぶりー、カーズマ！」

一馬「アランもこっちに来てたのか」

正信「いい車だろ！」

一馬「リッチですねえ、生田インターナショナルは——」

正信「まあ、本物だったら結構するけどな！」

一馬、車に優しく触れている手が止まる。

中島「レプリカだよ」

一馬「判らないよ本物か偽物か……だけど、何でこの車が……」

中島「生田インターナショナルの海外事業部門でメーカーさんと付き合いがあって」

一馬「ベンツと!？」

中島「そう、それで……」

正信、話に割って入る。

正信「それでメーカーのお偉いさんが『うちの車で何かいい物創ってもらえる?』って言

うからさ——」

中島「そうなんだけど、その真意は『新しい車に新しい機能を搭載してほしい』という意味のはずなんだけど、正信さんが強引に65年も前の名車をベースにするって言うって、こ
うなった……」

一馬「さすがー、正信先輩！」

正信「ベンツと言えば300SL、ガルウイングだろう」

一馬「その通りです！」

アラン「こんな古い車でいいの!？」

正信「機能がメインであって車種は関係ない！むしろ、メーカーさんの名車をベースに
することで敬意を払っていることになる！」

一馬「先輩と車の趣味で一致するとは思ってなかったけど……正解です、たぶん。メーカ
ーさんへのサプライズになりますよ！」

正信「だよなあ、雪家」

一馬「ところで新しい機能って何です？」

正信「『カードローン』をどう思う？」

一馬「クレジットカードは持っていますが、ローンは組んだことないです」

正信・中島、鼻で笑う。

中島「飛ぶんだよ、一馬」

一馬「あっ、『カー・ドローン』ってことか……凄いじゃん!？」

正信「正式名称：カー・ドローン300SL、通称：ヌードローン、愛称：ボーンズ、ニ
ックネームは、まだない」

一馬「えっ、また別名が二つもあるの？好きだね、この人……ついでに言っとくけど、
愛称とニックネームは一緒だから」

正信「まだ試作段階なので、あの模型で説明しよう」

★(図-8参照)

アラン、30cm程のミニカーを手の平に載せ持ってきて、正信にリモコンを渡す。

正信、左手にリモコンを持ち『このボタンが車内のAボタンと同じだ』と言いながら
右手で車内のAボタンを指さす。

正信「ボタンを押すから、ミニカーを見て！」

と、リモコンのボタンを押す。

ミニカー、運転席・助手席の以外のボディーの鉄板が十枚ほどに分割されてアランの
手の平から落ち、ガルウイングの両ドアが上に開く。運転席・助手席の以外はパイプ
フレームとタイヤとプロペラのみ骨みみたいな車体になる。次にボンネットに4基・
トランク3基のプロペラが回り始めアランの手の平から上昇してホバリングする。

一馬「えっ、ホントに飛べるの!？」

正信「300SL飛行モードだ。(ミニカーを指差しながら)説明を加えると、ボディーの鉄板が落ちたのは、」

一馬「軽くするため！」

正信「その通り！ その為、ガルウイングの両ドア以外は原形をとどめていない」

一馬「ボディーをはぎ取るので、ヌード。そしてパイプの骨みたいになるから、ボーンズってことだね！ でも、プロペラはあるけど、エンジンが無いのでタイヤで走行できないのでは!？」

正信「それは大丈夫だ。各タイヤのホイール自体がモーターなのでちゃんと走れる四輪駆動車だ。ちなみに運転席周りのボディーは強力なソーラーパネルも兼ねている、真夏の日差しなら3時間でフル充電できる。そして特製バッテリーはシートの下だ」

一馬「なるほどー、外見はクラシックカー、でもその実態は、空をも飛べるEV、電気自動車かあー」

と、ホバリングしているミニカーと実車を交互に何度も見比べる(本当に飛べるのかなあという疑いの目で)。

○ ゆう愛の家・病室202 (早朝)

結日、自分のドナーが見つかったことを知り笑顔全開している。

結日「やったーやった、見つかったー」

移植手術の準備で慌ただしくなる室内。結日の父、大橋憲弘(40)と母、大橋佳奈子(36)と晴久が駆けつける。

元気に喜ぶ結日に驚く一同。

憲弘「結日、そんなにはしゃがないの！」

結日「あっ、お父さん、お母さん。だって、うれしんだもん！ 見つかる確率ほんとに少ないんだよ！」

看護師A「お父さんの言う通りですよ。結日ちゃん」

看護師B「大事な時なんだからね！」

裕子と担当医が入ってくる。

裕子「お父さん、お母さん、急がせましたね」

担当医「ハル君も、だもんだな〜」

と晴久の頭を撫でる。

晴久、嫌そうに担当医の手を払う。

憲弘・佳奈子「いつも結日がお世話かけています」

と揃って頭を下げる。

裕子「こんなに早くドナーが見つかって良かったね！」

担当医「今からお二人、ナースセンターに来てもらえますか。手術の詳細を説明しますの

で……」

裕子「ハル君、お姉ちゃんと一緒に居てね」

担当医、両親、裕子の四人は出てナースセンター奥の面談室へ入る。

○ 同・面談室

担当医より説明を受ける両親。見守る裕子。

担当医「移植手術自体は以前お話していた段取りで行います。膵臓移植の場合、虚血許容時間は24時間です。今回、時間は十分あります。遅くとも明日の今頃には手術を開始しています」

憲弘「何か問題でも……」

担当医「実は、結日君の状態ですが、あまり芳しくありません」

佳奈子「でも先生、あんなに、はしゃいでたんですよ……」

担当医「……」

憲弘「でも明日の移植さえ無事に済めば大丈夫ですよ、先生」

担当医「二つの問題があります。一つは、明日の移植手術自体に耐えられるかどうかです」

憲弘「あんなに元気じゃないですか!?!」

担当医「そうなんです、躰の内と外では事情が違います。移植する患部自体が耐えられるかどうかの話なんです。ただ、この問題は経験上、乗り越えられると思います。この件は可能性の話として聞いてもらえればいいです」

憲弘「もう一つは……」

担当医「それは、今回の移植が最初で最後になるかもしれません。今回成功しなければ、二度と移植が出来ない可能性も……」

佳奈子「それは、命も危ないってことですか!?!」

担当医「……はい……そこまで含んでいます」

佳奈子、泣き崩れる。背後から佳奈子の肩を抱く憲弘。

裕子「でも、凄い強運ですよ！ 結日ちゃん。普通はこんなに早くドナーは見つからないんですよ！ 希望をつないだんですよ！ 結日ちゃんは」

担当医、深く頷く。

憲弘「そうですね。理事長さんの言われる通りかもしれない。なっ、佳奈子……」

佳奈子「先生、よろしくお願いします」

担当医「もちろんです。全力を尽くします」

○ K大学附属病院・手術室

慌ただしい手術室。

ドナーから膵臓が摘出される。

○ 同・通路

臓器搬送者、臓器が格納された専用ケースを手に小走りに通用口に向かい、車に乗り込む。

○ 新幹線・車内

臓器搬送者、専用ケースを両手で大事に抱え座っている。

○ 組織のアジト・メイン指令室

構成員A「ターゲットは、間もなく駅に到着する模様です」

森田「今どき一般人が使うような盗聴器を仕掛けただけで、こうも簡単に情報が手に入っているものかねー!? (薄ら笑いで) ゆう愛の家のセキュリティーを心配してあげるよ」

構成員A「予定通り、駅より5km離れたところで臓器を取得いたします」

森田、軽く頷く。

森田「間もなく、ショーの始まりだ! 会場は江ノ島南岸。すべての準備、抜かりないように!」

頭を下げる構成員ら。

○ 新幹線・到着駅

臓器搬送者、専用ケースを手に降車し、改札を出て、タクシーに乗り込む。

○ タクシー・車内

運転手「どちらまで?」

臓器搬送者、専用ケースをシートに馴染ませようとしている。

運転手「たぶん、ゆう愛の家でしょ?」

臓器搬送者「そうです。お願いします」

運転手「いや、以前もね、お客さんみたいなケースを持った人を乗せたことあったからね、分かっちゃったのよ……」

臓器搬送者「……」

運転手「近道してあげますよ! ちょっとだけ山道入った方が近いのよ!」

○ 竜宮城・中央指令室

中央モニターには祐斗誘拐事件の関係資料が映し出され、捜査関係者の会議が行われている。

一馬「警視庁でもちゃんと捜査は進んでいるんですね? 松藤警部!」

松藤「もちろん、警察も公開こそしていないが、ちゃんと動いている。が、手掛かりが一向に掴めん」

一馬「中島の身にもなってくださいよ！」

中島「……」

島田「分かっているよ。雪家」

ミスター「U T A (ウタ) に号令を掛けて、上空からの映像を大量に取り込み、A I にかけてみれば、どうでしょう」

一馬のM「かけー、ミスター。『生まれ変わる』ってこういうことかあ」

島田「ローラー掛けるには広範囲だが……」

松藤「どれだけの効果があるか分らんが、やってみる価値はありそうだな……」

× × ×

立花、入室する。注目する一同。

立花「通達する。雪家君、君を本日より、特殊作業員として正式に竜宮城の一員として迎え入れる決定をした……アルバイト契約として」

『アルバイト』の一節で驚く一同。

一馬「(小さな声で) バイトって冗談だったのに……」

立花「君のコードネームは『001』、一馬の『1』で丁度いいだろう」

一馬「スパイ感が出て来ましたね！ おれ断然やる気になってきたよ！ 中島——！」

中島のM「バイトでいいのかよ～。命賭けるかもしんないのに……」

× × ×

裕子、慌てた表情で入室し、中島を探す。

中島「どうした？ 裕子！」

裕子「移植用の臓器が……」

中島「どうしたの……」

アナウンス「磯山の県道にて、タクシーが何者かに襲われたとみられる強奪事案が発生！

搬送中の移植用の臓器が奪われた模様。繰り返す、……」

× × ×

(フラッシュ)

車外に倒れている運転手と臓器搬送者。

× × ×

(フラッシュ)

臓器搬送者、スマホを耳に当て、動かない運転手の方に目をやり顔を歪ませる。

× × ×

城員A「犯人と思われる人物より警視庁へコンタクトがあった模様です」

立花「この強奪事案も誘拐事件と繋がっている可能性が高い。よってこれより竜宮城が第

一司令部として動くこととする。警視庁へコード107を発令し、全指令は立花が執ることを通達せよ！」

城員A「了解しました」

一馬のM「これまた、かっけー、立花さん。『出世する』ってこういうことかぁ」

城員B「強奪事案の資料、受信完了しました。表示します」

映し出される資料に、あるサイトへのアドレスが表記されている。

ミスター「アドレスへ移動してください」

城員B「了解しました」

動画サイトの動画が再生される。深めのチェアーに脚を組み、掛けている森田。自身の顔を曝した上で話しかける。

森田「私は森田。一連の事件は私が指揮しています。警視庁に犯行声明を出すような回りくどいことをしましたが、当然、ゆう愛の家から生田インターナショナルまで届き、この動画を見ていることでしょう」

一馬「レオナの父親です」

森田「間もなく、面白いショーが始まる。一緒に楽しんでほしい。動画のやり取りも面倒なので、ライブカメラ特設サイトを用意している。そちらを表示しておくように！ アドレスはここだ」

森田、(テレビのCMで見るような仕草で) 両手の人差し指を下に立て、両手首を交互に上下させると、アドレスが表示される。

★ (図-9 参照)

島田「ふざけやがって、この野郎——」

森田「ひとつ言い忘れていた。一緒に楽しんでもらいたい人が居ました……連れて来ておいてもらえますか」

森田、再度 (テレビのCMで見るような仕草で) 両手の人差し指を下に立て、両手首を交互に上下させると、名前が表示される。

裕子「お父様!？」

中島「会長!？」

裕子の父、生田インターナショナル会長 生田祐介 (67) の名前が表示される。

動画の再生が終わる。

松藤「特設サイトの表示を」

城員B「了解しました」

特設サイトにはまだ何も映らない。

立花、机上マイクに向かって話す。

立花「城員に告ぐ。サイト並びに動画の解析、及び森田という人物についても更なる解析に当たれ」

特設サイトに森田の映像が現れる。

森田「ショーの前にしていただきたいことがある。こちらも顔を出している。そちらも顔が映るようにカメラを設置し、そのアドレスを表示してもらおう。すれば、双方向ライブ通信ができる。今から3時間後に、また会おう。その間に全て準備しておけ！」

映像が途切れる。

立花「カメラは奥のブースを完全防音に加工して内部のみを写すように設置してくれ」

中島、立花の元へ寄る。

立花「会長へのお話、お願いできますか？」

中島、頷く。

立花「それと、森田という人物の件は、会長がここに来てから私から話しましょう。

ここに来る前に下手に動揺させない方がよいでしょう。うまく話をしてお連れください」

中島、再度頷く。

立花、裕子の元へ寄る。

立花「裕子さん、移植の件について詳しく教えてください」

○ ゆう愛の家・面談室

担当医より説明を受ける両親。

担当医「問題が発生しました」

憲弘「何が……」

担当医「搬送中の移植用臓器が、強奪されました……」

憲弘・佳奈子「えっ、……」

担当医「……」

佳奈子「なぜ？ なぜ、結日の臓器なんですか？」

憲弘「先生」

担当医「……分かりません」

佳奈子、気を失う。佳奈子の躰を支える憲弘。

担当医「警察と生田インターナショナルからも動いてもらっています。状況を見守るしかありません」

憲弘「でも先生、時間は、……」

担当医「……」

○ 竜宮城・中央指令室

モニターには臓器強奪事件の関係資料が映し出されている。

立花、机上マイクに向かう。

立花「全員とも、よく聞いてくれ！ 強奪された移植用の臓器は、このホスピタルで少女

に移植されるためのものだ。虚血許容時間は最長で24時間。4時間前にドナーより提供されている。つまり、奪還まであと20時間しかない。全てに於いて急げ！」

松藤「管理官、私と島田は強奪現場を当たらせてください」

立花「既に、001が向かっています。……無意識に……」

島田「雪家——！」

と辺りを見回す。

立花「松さんと島田には、ここで待機の上、001のフォローをお願いします」

松藤「了解しました」

○ 同・研究室

一馬「車、借りまーす！」

アラン「まだダメよ。カーズマ」

一馬「急いでます、先輩。キーをください」

と300SLに乗り込む。

正信「まだ試作車だ！ 下手にAボタンなんか使ったら死ぬかもしれんぞー」

一馬「(急にシリアスな顔で) たしかに先輩が言うように、命がない任務かもしれない。

だけど許せないんですよ！ 簡単に誘拐や強奪をする奴らが——」

正信「(シリアスな顔で) 雪家、」

一馬「(だけど先輩(語尾をやさしく上げる)、先輩が作ったこの300SLとだったら、俺死んでもいいですよ！」

正信「お前、そこまで……」

一馬「はい」

正信「相、分かった(語尾を強く)。死んで来い！ 一馬」

一馬「はい、先輩」

正信、一馬にカードキーを渡す。

一馬、300SLを発進させる。

○ 組織のアジト・レオナの部屋

一回のみのノックで、勝手に入室する森田・構成員B・C・D。レオナ、ベッドに腰掛け、祐斗をあやしている。

森田「やっと出番が来たよ、ベイビー」

レオナ、森田を見上げ凝視する。

森田「おままごとは、おしまいだ！」

レオナ「ウ、ウー、ウー……」

構成員B・C・D、レオナをベッドに押さえつける。森田、祐斗を奪う。

森田「さーて、おじいちゃんと楽しいところへ行こう」

と祐斗を抱きかかえ立ち去る。

レオナ、軟禁状態にされる。

○ 海岸沿いの小型フェリー乗船場

一馬、駐車場に300SLを停める。フェリー案内のアナウンスが流れている。運転席のドアを開けて聞く。

一馬「なんかこのアナウンス、覚えあるんだけどなあー」

ダッシュボードの10インチモニターに島田が映る。

島田「001、何してる？」

一馬「001って呼んでくれるの～、島田さんも!？」

島田「嫌々だが、仕事だからな」

一馬「現在、フェリー乗船場に来ています。私が拉致されて、戻された時の微かな記憶を辿ったらここに来たんですが……。フェリーに乗せられて来たのか、ただ単にこの前の道路を通過しただけなのかがハッキリしなくて……」

島田「そんな時は乗ってみるんだよ！ 001（1のみ大きな声で、以後同様）」

一馬「雪家でいいですよ」

島田「乗ってみるんだよ！ 一馬001」

一馬「一馬は止めてください」

島田「乗ってみるんだよ！ 雪家001」

一馬「なんか、馬鹿にされてるみたいで、超ムカつくんですけど、もうすぐ出港するので乗り、ます」

一馬、乗船待合室の航行ルートの地図の上で、江ノ島から南西に20km先の『鬼島』を、江ノ島から（尖った爪の）小指を立ててなぞる。

○ 鬼島・フェリー乗船場

鬼島：島民約1000人。近年、観光、特にマリソレジャーに力を入れている。島西岸には小高い赤鬼山があり、海岸から頂上まで続くワインディングロードを走るために車で訪れる観光客も多い。

一馬、下船し観光案内所の前で停車する。通りかかった観光客らが足を留め300SLを見ている。

外人観光客A「ブラボー、メルセデス！」

外人観光客B「ギャルウイング！ ワーオ！ ワンダフォール！ アンードゥ、ビューティフール！」

一馬、ドアを跳ね上げ降りる。

一馬「オー、サンキュー」

と外人観光客らに右手でグッドサインをして観光案内所に入る。

× × ×

一馬「すみません」

職員A「はい、何をお尋ねで？」

一馬「この鬼島の近くにも島は多いんですか？」

職員A「そだねー、離島が十ほど点在してんだけど、無人島だよ」

一馬「そう、ですか……」

職員B「それは違うよ……たしか一つは、バブルの頃からどこかの会社の保養地になってたんじゃないかい!？」

職員A「だけど、今でも使われてんのか？」

一馬「その離島に渡るには……」

職員B「この前の道を西に1kmほど走ると、ヤン港って栈橋だけの小さな港があるんだけどね……」

職員A「あっ、思い出した！ 一回見たことあんだけど、車が積める自家用船がヤン港に泊まってたな～」

職員B「その船だよ。その船でたまに渡ってんだよ」

一馬「離島に行くフェリーなんて無いですよ？」

職員B「(笑いながら) もちろん無いよ。島に車で渡るには、自家用船で迎えに来てもらうしかないべ」

職員A「あんた、あん人たちの知り合いではないのー？」

一馬「ハァ～」

職員B「残念だけど、泳いで渡るしかないべ～」

と笑いをこらえる職員A・B。

一馬「とりあえず、ヤンコウに行ってみるか……」

○ 同・ヤン港

職員Aが話してた車が積める自家用船が泊まっている。

一馬、走行中の車内から自家用船を見つけ『ビンゴー』と叫び、ヤン港を少し通り過ぎたドライブインの駐車場に停車する。

一馬「もし自家用船の奴らが、組織の人間ならば、一目見れば判るかも」

一馬、ポケットから携帯単眼鏡を取り出し栈橋の方を覗く。その単眼鏡のフレームから富士山の映像に切り替わる。

○ 生田インターナショナル本社・会議室

富士山を眺望できる高層ビルの一室。

会議用デスク（トラック形状）を背に厳しい顔で外を眺める会長 生田祐介。デスクには重役ほか十名が着座している。

会長「そんな数字を聞くために、お前らと呼んだのではない……」

重役「しかし、これ以上は――」

緊迫した部屋に、ノックの後、会長秘書（男性）が入室し素早く会長に駆け寄り耳打ちする。会長、振り向く。

会長「その数字に $\sqrt{5}$ を掛けた数字を持ってこい……いや、 $\sqrt{9}$ だ！ 解散！」

足早に退出する十名と秘書。入れ替わりに中島が入室する。

中島、一連の流れを話す。

× × ×

会長「(疑念に満ちた顔で) 分かった、向かおう」

○ 竜宮城・中央指令室

臨戦態勢の室内後方には、森田との交信のための（六畳程の）ブースが防音加工され設置完了している。

立花「よく聞いてくれ！ これより後方のブースで森田と交信をするが、この指令室内のやり取りを傍受されないようにブースは完全防音にしている。よってブース内の映像並びに音声は、全員が共有できる中央モニターで確認してほしい。ブース内には私が常駐し森田と交渉する予定だ。よって私の声で指令を出すわけにはいかない。私からの指令は手元のパッドよりテキストで指示をする。その指示を元に松藤警部より最終指示を出してもらうので従うように。なお、指令室内の音声は私の内耳イヤホンで聞いているので、そのつもりで」

× × ×

一馬「こちら、001。応答されたし」

一馬の顔がモニターの一部に表示される。

島田「ハイ、こちら島田！」

一馬「なに渋い声で決めてるんですか？ 島田さん」

島田「中央モニターに切り替えたので、皆が聞いている。001も改まって話すように」

一馬「了解しましませう。島田警部補」

島田「ふざけるな！ 雪家――」

一同の鼻息だけの乾いた笑い声が響く。

一馬「マジな報告です。現在、江ノ島から南西に20kmの『鬼島』に居ます。私を拉致した組織の物かもしれない船を監視中です。所有者が現れれば、組織の人間かどうか、すぐに分かると思います」

島田「了解。そのまま、保持、監視せよ」

一馬「ラジャー」

○ 組織のアジト・500m沖合

構成員四名が乗った全長15mの運搬用ボートが停船し船尾から幅3m、奥行4m、厚み20cmの発泡スチロールボードを海面に下ろし、何かをセッティングしている。

ボードの四隅には2m程の物干し竿みたいな柱が立っており、ボードより一回り広い屋根を支える構造になっている。

○ 竜宮城・中央指令室

中島、会長を連れて入室する。追って裕子・正信が入室する。

立花「お待ちしていました。会長」

会長「ああ」

立花が会長に、森田の件を話そうとしている。

城員C「森田より映像入電」

森田の映像が、大きくモニターされる。

森田「部屋は映っているが、誰もいないのか？」

立花、会長を残し、急ぎブースに入る。

森田「どなたかな？」

立花「私は、立花といいます。あなたとの交渉人です」

ブース内のカメラは、椅子に座っている立花の胸から上を捉えている。

森田「……準備していますか？ 生田、会長、さん……」

立花「もちろん……」

森田「なら、いいでしょう」

立花「入室してもらいますか？」

森田「もう少し後でいいでしょう」

立花、視線はカメラに向けたまま、机の上のパッドに右手を伸ばしテキスト入力の状態をとる。

森田「まず、この映像を見てもらいましょう」

森田の映像から、構成員らがセッティングしたスチロールボードの映像に切り替わる。

ボードの上にはドーナツ型ドローン一機と、カプセルが二つ並んで置いてある。

裕子「左のカプセルは祐斗!?……」

会長「祐斗なのか？」

中島「そのようです……」

森田の声「この海に浮かぶボードの名前を『二択ボード』としよう。場所は江ノ島南岸辺

り……かな。カプセルは共に、直径 60 cm の規格 B、赤子のカプセルには酸素供給機、臓器のカプセルには冷凍保持器をそれぞれ付けている、ので、あと 30 分位は、とりあえず大丈夫だ」

裕子、モニター見ながらその場にひざまずく。

森田の声「格納できるドーナツドローン一機は、私からのプレゼントとしよう。UTA の通信コードを、『1 1 9 2 T K B』に合わせれば、そちらからの操縦が可能になるはずだ」

森田、(テレビのCMで見るような仕草で) 両手の人差し指を下に立て、両手首を交互に上下させると、通信コードが表示される。

島田「いつまでふざけてんだ！ こいつー」

立花、視線はカメラに向けたままブラインドタッチでパッドに片手入力してゆく。

中央モニターの一部にテキストが表示される。テキスト：『ミスター、UTA を江ノ島南岸に向かわせて』

松藤「ミスター、表示の通り、頼む」

ミスター「すでに戦闘機二機、スタンバイ済です。急行させます」

海岸べりの錆びれた倉庫の扉が開き、勢いよく大型ラジコン戦闘機が飛び出す。

城員A「UTA の通信コードを、『1 1 9 2 T K B』にセットアップ完了です。ミスターによるドーナツ操縦が可能です」

中央モニターの一部にドーナツのカメラからの映像(前方のカプセル二つ)が表示される。

× × ×

森田の声「見ての通り、簡単な二択だ！ そろそろ顔を見せてもらおうか、会長」

立花「入ってもらえますか」

会長、ブース内に入る。

森田の声「何か思い出したか？ 生田祐介！」

会長「(目を左右に泳がせながら) 分らん、何の話だ？」

森田の声「二十四年前、お前が俺に突き付けた二択だ！ 再現したつもりだが、まだ思い出せないか？」

会長「あっ、あの森田かぁ……すっかり忘れていた……す、す、すまない……あ、あの時はすまない……」

森田の声「やっと思っ出したか!? 俺との記憶は、過去の小さな、取るに足らん記憶に過ぎんか……そうだろうなあ、世界の生田インターナショナルに成るということは、そういうことなんだろうなあー」

会長「本当にすまない。本当に悪いことをした。何でもする。孫の命だけは助けてくれー。……裕子、許してくれ……」

と崩れた土下座の体勢を取る。

森田の声「あの時の二択は、どちらを選んでも、私の会社が破滅するように仕組まれていたと、後で知ったよ。俺が苦しみながら、考えに考えて選んだ答えを、お前は腹の底で笑っていた、そうだろう——？ あの時、俺は会社だけでなく、妻も失ったよ……」

立花「森田さん、こんなに会長も反省している。何か他に要求があれば応じます」

× × ×

城員A「UTAパイロット『アマゾン』と『ハリケーン』からです」

アマゾン「こちらアマゾン。二択ボード、発見できません」

ハリケーン「こちらハリケーン。同様に発見出来きず。もしかして江ノ島南岸はフェイクでは!?!……」

× × ×

立花、テキスト：『敵のドーナツUTAから逆探知して』

× × ×

松藤「逆探知で、位置は特定できんのか？」

城員D「UTAに何がしらのフィルタリングがされているため特定できません」

× × ×

森田の声「忠告してあげよう。そろそろ答えを出した方がいいのではないか！」

× × ×

(スローモーション)

中島・裕子、お互いを見つめ合い、唇は動くが声にはならない。

× × ×

(フラッシュ)

裕子に抱かれ微笑む祐斗の顔。

× × ×

(フラッシュ)

ドナーが見つかり喜ぶ結日の顔。

× × ×

固唾をのむ一同。

(スローモーション終わり)

× × ×

森田の声「(無機質な冷めた口調で) どちらか一つのカプセルをドーナツに格納した時点で、もう片方のカプセルは海中へと沈み始める……」

立花、ブースを出る。

× × ×

裕子「(小さな声で) ……臓器……」

中島「(目を閉じて) ……臓器を……ミスター、臓器を……」

ミスター、ドーナツを操縦し、臓器のカプセルの上でホバリングさせ、中島の目を見る。

中島、(崩れた裕子の肩をしっかりと抱いた状態で) 小さく頷く。

ミスター「格納します」

臓器のカプセルを格納したドーナツは上空へと上昇する。

ミスター「現在位置不明、一面海にて、どの方向に飛行すればよいか、判断できません」

松藤「アマゾンとハリケーンは……」

城員A「まだ、捜索中です」

島田「ドーナツのカメラだけが頼りか……」

城員B「江ノ島南方の位置と仮定すれば、現在時刻から推測して太陽と逆方向に進めば江ノ島上空まで到達できると思います」

立花「ミスター、それでいい！」

ミスター「了解！ 太陽と逆方向に進路を取ります」

× × ×

城員A「アマゾンからです」

モニターに、アマゾンのUT A戦闘機からの映像が出る。

アマゾン「こちらアマゾン。ミスターのドーナツ発見しました！」

ミスター「ナイス！ アマゾン」

アマゾン「ドーナツの前に移動します」

ミスター「今度ミスド、おごってあげるよ！」

城員B「アマゾンの現在位置は、竜宮城より南南西 25 kmの位置です」

アマゾン「飛行プラン、送信願います」

一馬「こっちにもアマゾンの位置を送って！」

城員D「了解、……共に送信しました」

アマゾン「受信完了、私について来てください、ミスター」

ミスター「サンキュー、アマゾン」

立花「ハリケーンは、時間の限り、周辺捜索を頼む」

ハリケーン「了解！」

× × ×

ミスター「ゆう愛の家が見えてきた。ここまでありがとう、アマゾン」

アマゾン「無事、先導できたこと、光栄に思います」

アマゾンUT A戦闘機、ドーナツの前を離れる。

島田のM「(タジタジ顔で) 凄いな、こいつら！ やり取りが本物みてーだ……」

○ 鬼島・ヤン港

監視中の自家用船の前にアメ車が二台、停車し構成員らが降りる。

一馬「あいつらだ！ 間違いない。……こちら001、自家用船は組織の物です」

一馬、単眼鏡を外し際に、不覚にも構成員らと目が合う。

一馬「組織の人間と目が合っちゃいました……今から逃げます」

○ 竜宮城・中央指令室

島田「なにー!？」

一馬「だから、おれ、面が割れてるから、気付かれちゃったんですよ」

島田「間抜けなスパイ、001」

○ 鬼島・ヤン港

一馬、ドライブインの駐車場から急発進し赤鬼山の頂上へと向かうワインディングロードへと逃げ込む。アメ車二台で追う構成員ら。

一馬「正信先輩、居ますか？」

○ 竜宮城・中央指令室

正信「居るぞ！ 一馬」

一馬「秘密兵器、装備してますよね？」

正信「Aボタンのみだ！」

一馬「えええ、マジで？」

正信「だから、試作車だって……」

迫るアメ車二台、300SLのリアカメラの映像も映し出されている。

『パン、パン』と乾いた発砲音がモニターから聞こえる。

一馬「ヤバイかな、本物の銃で撃ってるみたい！」

正信「一馬、飛べ！」

一馬「模型でしか見てないけど、大丈夫？ 先輩」

正信「車の前後の映像は、こっちでモニター出来ている。俺が指示を出す。素直に従え！」

一馬「(重たい声で) ラジャー」

ハンドルを巧みに切り、銃弾をかわす一馬。モニターを見守る一同。

城員A「300SL、間もなく山頂です」

一馬「せんぱーい！」

正信「今だ！ Aボタン、押せ——！」

一馬、Aボタン押す。

運転席・助手席の以外のボディーの鉄板が十枚ほどに分割されて道路上に散乱する。

その散乱したボディーの破片に後続のアメ車が乗り上げ横転する。先頭のアメ車は破片をかわし、なお追ってくる。

★ (図-10 参照)

× × ×

歓声上がる中央指令室。

× × ×

300SL、模型と同様に運転席・助手席以外はパイプフレームとタイヤとプロペラ
のみの骨みみたいな車体になる。ガルウイングの両ドアが開き、次にボンネット
に4基・トランク3基のプロペラが回り始める。

正信「説明してた通り、左足のアクセルが、ボーンズのアクセルだ！」

銃声とキュルキュル音の後、300SLのリアが流れる。

一馬「リアタイヤ、撃たれた——」

正信「踏み込め——一馬！」

一馬、左足のアクセルを思いっきり踏み込む。

山頂の展望台から飛び立つ300SL。飛び立った300SLを見て、呆気にとられる
構成員と観光客ら。飛行モードへ変態する。300SL飛行モード：四輪のタイヤ
が90度回転し水平になる。

一馬「飛んでるよ、せんぱーい！」

正信「正に『ガルウイング』だ！」

× × ×

歓声を上げる中央指令室。

○ 赤鬼山西方の海上・300SL

一馬「001、これよりアマゾンが居たポイントまで飛行します。……中島、居るか？」

中島「あぁ」

一馬「祐斗は大丈夫だ！ あと20分は装置が働いている。海の中だけど必ず生きている。

俺が見つける！」

立花「ミスター、001援護の為にUTAを出してくれ？」

ミスター「既に向かっています。『パルテノン』と『アップル』です」

立花「それからアマゾンとハリケーンが搜索したエリアを001に送信せよ」

城員A「了解」

立花「001、送信したエリアには何も無い。エリア以外を探せ！」

一馬「ありがとうございます」

○ 組織のアジト・メイン指令室

構成員Cの後ろに立ち、アメ車からの映像に見入る森田。

森田「飛ぶんだねー、雪家、一馬」

と構成員Cの首を優しく掴み、力を込めてゆく。

森田「赤子のカプセル、探しに来るのかね〜」

森田、構成員Cのむせる声で我に返り首から手を放す。

森田「酸素は、あと15分もない。助けるのは無理だろうが、一度見逃してやったのが癪に障る……撃ち落とすに行け！」

○ 海上・300SL

飛行中の300SLの運転席から海面を下に覗き、二択ボードを探す一馬。

一馬「こちら、001。二択ボードらしき物体を発見。確認します」

島田「了解。ターゲットカメラで写してくれ」

一馬、ターゲットカメラを海上に合わせる。竜宮城の中央モニターに小さく映ると同時に、その映像が大きくブレる。

一馬「ミサイルか何かで、車体後方を撃たれました！」

正信「大丈夫か？」

300SLのすぐ上を後方から組織の戦闘機が二機、かすめ飛ぶ。

一馬「敵機二機確認、上を飛んでいます。このままじゃ、また撃たれます……」

松藤「パルテノンたちはまだか？」

城員A「到着まであと一分です」

島田「一分持ちこたえろ！ 雪家——」

次のミサイルが300SLのヘッドライト横に命中しターゲットカメラの映像が途切れる。

一馬「二発目、被弾しました。高度を下げています。このまま着水しそうですが、どうなります!? せんばーい！」

正信「よく聞け、一馬。説明してなかったが、300SLは水中もokだ！」

一馬「えっ、そうなんですか？」

正信「そうなんです！ 着水すると自動で感知し、水中モードに切り替わるので安心しろ！」

パルテノン「こちら、パルテノン。300SL確認しました。敵機も確認、交戦します」

アップル「こちら、アップル。敵機は我々に任せてください」

一馬「サンキュー！ アップル、パルテノン」

正信「一馬！ 一度水中に入ると、通信は遮断される。再度、陸に上がっても復帰しないかもしれない」

一馬「なぜ？」

正信「し、試作車だから……」

一馬「ですか——」

300SL、着水し始める。

正信「大事なこと言い忘れてたが、酸素マスクはダッシュボ……、……」

○ 海中・300SL

300SL、ルーフまで冠水し、完全に通信が途切れる。水中モードへ変態する。

300SL水中モード：プロペラが水平から60度前方に回転し前進の推力を得る。また四輪のタイヤは水平のまま。

息が出来ず苦しみ始める一馬。

一馬のM「酸素マスク、ダッシュボードから自動で出てこないけど……」

一馬、必死でダッシュボードを開けたり叩いたりするが酸素マスクは出てこない。意識が薄れる中、ダッシュボードの下から気泡が出ているのを確認し手を伸ばす。

一馬のM「これかー」

と、ダッシュボードの下から気泡の出ているチューブを引っ張り出すと同時に口にくわえ、呼吸を再開する。

一馬のM「死ぬかと思った……ダッシュボードの、下かよ!? 手動の上に、チューブだけじゃん!？」

× × ×

海上では応戦が続き、パルテノンとアップルが全敵機を撃ち落とすことに成功。

× × ×

水中ではチューブをくわえただけの一馬を乗せた300SLが二択ボードに向かって前進している。

一馬のM「たぶん、この方向で50m位と思うけど……」

進む300SLの前方の海水面に敵機が墜落してくる。見上げる一馬。

一馬のM「あー、ビックリした——。これは敵機だ！ やってるな、アップルパルテノン！」

沈んでゆく敵機を横に300SLが進む。二択ボードが見え始める。

一馬のM「見えた！ カプセルだ」

二択ボードの5m下に、重しに繋がれた祐斗カプセルが沈んでいる。その横に300SLを停める。繋いでいるワイヤーは直径5mm程の化学繊維製。

一馬、ポケットから十徳ナイフを取り出し、ナイフを引き出し、ワイヤーをゴシゴシと切り始める。半分ほど切ったところで刃が零れる。今度はヤスリを引き出し切り始める。ヤスリも潰れるが、ようやく切れる。

× × ×

(一馬の回想)

ダイソーで買い物中の一馬。(かごに入れたり、棚に戻したり) 迷いに迷って百円の十徳ナイフをかごに入れる。

(一馬の回想終わり)

× × ×

一馬のM「買っててよかったあ——」

海面に浮きあがる祐斗カプセル。

一馬、ワイヤーの端を片手で握り前進する(風船を持った少年が、流れるように泳ぐ魚の群れと共に)。

○ 組織のアジト・メイン指令室

構成員A「全機、撃墜されました」

森田「何たることだ——お前ら——」

構成員C「二択ボードの映像をご覧ください」

モニターの一部に注目する一同。

構成員C「カプセルが浮いています。この島の方に向かって移動しています」

× × ×

森田「ゆ・き・い・え——」

森田の怒りにビビる構成員ら。

森田「レオナを連れて来い！ (少し笑った後) これより雪家君を出迎えてあげようじゃないか——」

○ 同・浜辺

真夏の太陽の下、煌めく白浜。

その白浜に立つ森田・レオナ・構成員ら。

一馬のM「もうすぐ浜辺だ、祐斗、待ってろよ！」

300SL、水中モードから陸上モードに切り替わり、海中から浜辺へと上がって行く。

一馬、海面から少し上がると、森田らが待ち受けているのが分かったが、そのまま上陸し停車する。ずぶ濡れのまま、くわえているチューブを吐き出し、ニッコリと顔を引きつらせる。

森田「待ってたよ……雪家君！」

レオナ、カプセルを引き上げ、祐斗を取り出し『ウ、ウー、ウー』と抱きしめる。注目する一同。

森田「いい車だな……」

一馬、ニッコリと顔を引きつらせる。

森田「いいオモチャが手に入った。(構成員に向かって) 私も一度乗ってみたい……すぐ修理をしておけ！」

構成員D「了解しました」

森田「車を降りろ！」

一馬、(シートに座った状態で) 股間の上の魚を二尾つまみ上げ、横に立っている構成員Eに笑顔で差し出す。

一馬「一つは焼いて、一つは刺身で、お願い……」

○ ゆう愛の家・手術室

× × ×

手術台の上に麻酔マスクの結日が眠る。

担当医「これより臍臓移植手術を始める」

× × ×

○ 竜宮城・中央指令室

一馬からの通信が途絶え、手掛かりを失う一同。

アップル「こちら、アップル。二択ボードは確認できますが、300SLは見えません」

立花「ミスター、UTAでそのまま搜索続行！」

× × ×

城員C「森田より映像入電」

アジトのメイン指令室全体の映像が、大きくモニターされる。森田・一馬・レオナ・祐斗が映る。

レオナ、上体をゆすったり、指を使ったり、笑顔を作ったりして、祐斗が泣かないようにあやしている。

一馬、口にガムテープを貼られ車椅子に首・手・足を拘束されて座らされている。

中島・裕子、『祐斗——』と叫びながら安どの表情で見合う。

立花、急ぎブースに入る。

森田「雪家君は、優秀な部下だね！」

一馬、拘束されたままの左手でグッドサイン、右手でVサインを決める。

森田「しかし、少しだけスパイ気取りなのが癪に障るがね……」

島田のM「そうなんだよ、バイトのくせに」

○ 組織のアジト・メイン指令室

森田「雪家君に比べたら、私の部下は間抜けだ。カプセルの赤子が生きていては、二択の

意味がない。私の計画は失敗だったということになる……」

森田、いきなり近くに居る構成員Cを背後から何度も殴りつけ、血だらけにする。竜宮城のモニターを見守る一同も一瞬、目を覆う。

レオナ、祐斗を守り抱いたまま逃げようとするが、構成員F・Gから躰を押さえられる。

森田「お前もか——」

とレオナの頬をはたく。

構成員C、森田に殴られ血だらけの顔で、再度レオナに手を上げる森田の前に立ちはばかり、殴り掛かろうとする右腕を両手で握り留め、『お前の下で働くのはもう御免だ——』と吐き、森田の指でしか押せない（安全カバーを押し破り）メイン指令室自爆ボタンを力づくで森田の指を押し付けて押す。

アナウンス「生体認証完了、爆破起動開始。（サイレンの後）爆破消滅まで3分、爆破解除はできません。爆破消滅まで2分50秒、爆破解除はでき……」

構成員A「逃げろ——！」

逃げ出す構成員らで混乱するメイン指令室。

森田、どうする事も出来ず、悔しい表情で構成員Cを殴り倒し、レオナ・祐斗を無理やり連れて逃げる。

構成員C、倒れ際、一馬の車椅子にもたれかかる。

一馬、構成員Cと目が合う。首を振って『ガムテープを剥がしてくれ』と目で訴える。

構成員C、意識が薄れる中、ガムテープの端をつまみ、剥がしてあげようとするが、力が入らず、一気に剥がせない。2cm剥がしては止まり、2cm剥がしては止まりの連続になる。

一馬のM「痛い——！ 一気にお願い——」

と顔を歪ませる。

○ 竜宮城・中央指令室

立花、急ぎブースを出る。

立花「ブース内の通信を全解除！」

城員A「了解」

ブース内カメラの映像が中央指令室全体の映像に切り替わり、竜宮城とアジトのモニターが直接つながる。

○ 組織のアジト・メイン指令室

一馬と構成員Cしか居ない。

アナウンス「爆破消滅まで2分30秒、爆破解除はでき……」

構成員C、最後の気力で残りのガムテープを剥がし息絶える。

一馬、最後の剥がしに『アー』と声を上げる。

一馬「まだ見つからないの——？ 島田さん！」

とモニターに向かって叫ぶ。

× × ×

パルテノン「こちら、パルテノン。300SL発見しました」

島田「どうすればいい？ 雪家！」

一馬、目の前の指令デスクと天井を交互に見る。

一馬「この車椅子の解除スイッチがデスクの上にあります。丁度このドームの中心にあります。一か八か、UTAに上から突っ込ませてください」

島田「正気か、雪家！ おまえもすぐ近くに居るんだぞ！」

一馬「でも、このまま動けないよりいい！ 直径20m位のドーム、空から分かるー？」

パルテノン「樹木に覆われていますが、確認しました」

一馬「パルテノン、真上からそのドームの中心に突っ込んでー！」

パルテノン「了解！ ちょうどパワーが無くなるどころです。一花咲かせます！」

× × ×

森田に連れて行かれていたレオナが祐斗を抱いてメイン指令室に戻ってくる。

× × ×

パルテノン機、100m急上昇し向きを変え、真逆さまにドームの中心に突っ込む。

屋根を貫通したパルテノン機は大破しデスクの上に落ちる。一面埃が舞う。

一馬、衝撃で車椅子ごと倒れる。

レオナ、とっさに祐斗をかばうが、パルテノン機の破片を頭部に受け倒れ込む。

車椅子は解除されない。

一馬「レオナ——！」

一馬、もがきながら車椅子を揺らす。

車椅子の揺れがデスクに伝わり、天井からぶら下がっているパルテノン機の破片がスイッチの上に落ち、解除される。

一馬、『助かったあー、サンキュー、パルテノン』と口にしながらレオナの元に寄る。

★ (図-11参照)

一馬「レオナ！」

レオナ、額から血を流しながらも、気を取り戻す。

アナウンス「爆破消滅まで1分30秒、爆解除はでき……」

一馬、レオナの入ってきたドアに向かうが衝撃の影響を受けていて開かない（ドームの出入口はこのドアのみ）。

島田「どうした？ 雪家！」

一馬「ドアが開きません……」

松藤「U T Aは、」

城員A「アップルがまだ旋回中です」

ミスター「どうするんです？」

立花「壁に突っ込むんだね。松さん？」

松藤「はい！」

× × ×

一馬「アップル、聞こえるー」

アップル「こちら、アップル。聞こえます」

一馬「ドームにつながる通路は分かる？」

アップル「確認できます」

一馬「通路の反対方向から水平に突っ込んで！ できれば地面から1 m位のところに！」

アップル「了解！ 壁から離れてください」

一馬、レオナと祐斗を安全な位置に移動する。

アップル機、海上すれすれを速度を上げて飛行し、木々の少ない方向からドーム側面に突っ込む。

★ (図-1 2 参照)

衝撃と共に壁に穴が開くが、崩れかけていた屋根がレオナの脚を直撃する。

レオナ、『うー、うー』と悲鳴を上げる。

一馬、脚の上の大きい瓦礫をどうしても動かすことが出来ない。

レオナ、涙を流し『うー、うー』と手話を始める。

一馬、思い付いたようにモニターに向かって叫ぶ。

○ 竜宮城・中央指令室

一馬「裕子先輩！ 何て言ってます？」

手話のできる裕子が応じる。

裕子「早く、私を置いて逃げて……」

× × ×

アナウンス「爆破消滅まで 50 秒、爆破解除はでき……」

立花「(無機質に) 0 0 1、帰還せよ」

立花に振り返る一同。

島田「(立花を睨みつけ) 立花——！」

松藤「雪家、出ろ！ 早く出ろ——！」

○ 組織のアジト・メイン指令室

× × ×

(スローモーション)

一馬の首を両手で握り、ゆっくりと絞めるレオナ。苦しく目を閉じる一馬。

一馬のM「あの時の仕返しか!？」

× × ×

(一馬の回想)

結婚式当日。レオナを取り押さえ首を両手でつかみ地面に押し付ける一馬。

(一馬の回想終わり)

× × ×

手の力を一瞬緩めるレオナ。目を見開く一馬。次の瞬間、瞳を閉じたレオナが顔を近づけ一馬にキスをする(鼻をぶつけながら、触れるか触れないかの、不慣れな、探るような)。一馬、さらに大きく目を開く。

(スローモーション終わり)

× × ×

アナウンス「爆破消滅まで 40 秒、爆破解除はでき……」

一馬、アナウンスで我に返り、レオナを置いたまま、祐斗を抱きドームを脱出する。

○ 同・浜辺

一馬、祐斗を抱いて 300SL に乗り込む。カードキーを差し込みアクセルを踏み込む。

○ 竜宮城・中央指令室

レオナと裕子の手話が続いている。

裕子「(手話をしながら) 私が赤ちゃんの母親です」

レオナ「ゆっくりと (手話をしながら) ウー、ウー、ウー……」

裕子「『あなたの赤ちゃん奪ってごめんなさい』って」

裕子「(手話をしながら) もう済んだことよ！」

アナウンス「爆破消滅まで 10 秒、爆破解除はでき……」

レオナ「ゆっくりと (手話をしながら) ウー、ウー、ウー……」

裕子「(涙を流し)『私も、かわいい赤ちゃん、ほしかった』って……」

唇を結び、臉に涙をためる一同。

次の瞬間、映像が消える。

○ 組織のアジト・浜辺

300SL、滑走しながら上昇、島を旋回し、海上を飛ぶ。

ドームが爆発する。

一馬の涙が、ちょちょ切れながら、夕日に反射する。

○ ゆう愛の家・病室202

T「十日後」

F・I N

すっかり回復した結日のベッドの周りに、担当医・看護師、結日の家族と、中島・裕子・祐斗、そして一馬が居る。

担当医「もう大丈夫だ！」

結日「ありがとう、先生」

担当医「礼を言うなら、皆さんにだ！」

と中島・裕子・一馬を手の平で示す。

結日「本当にありがとうございました」

結日の家族も一緒に頭を下げる。

裕子、結日の横で祐斗を抱いて座っている。少しぐぜる祐斗。

結日「どうしたのー!？」

と祐斗の目の前に人差し指を立てて回す。

祐斗、人差し指をオモチャにして機嫌を直しニッコリと笑う。つられて笑う一同。

× × ×

(一馬の回想)

(スローモーション)

結日と同じように、人差し指をオモチャにして祐斗をあやしているレオナの姿。

(スローモーション終わり)

(一馬の回想終わり)

× × ×

瞼に溜めた涙が光る。

結日「あっ、涙くん！」

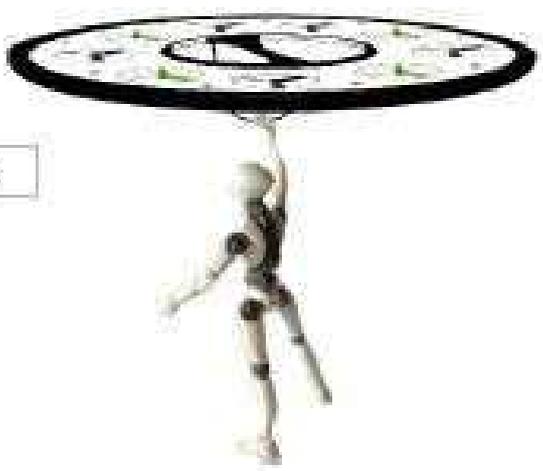
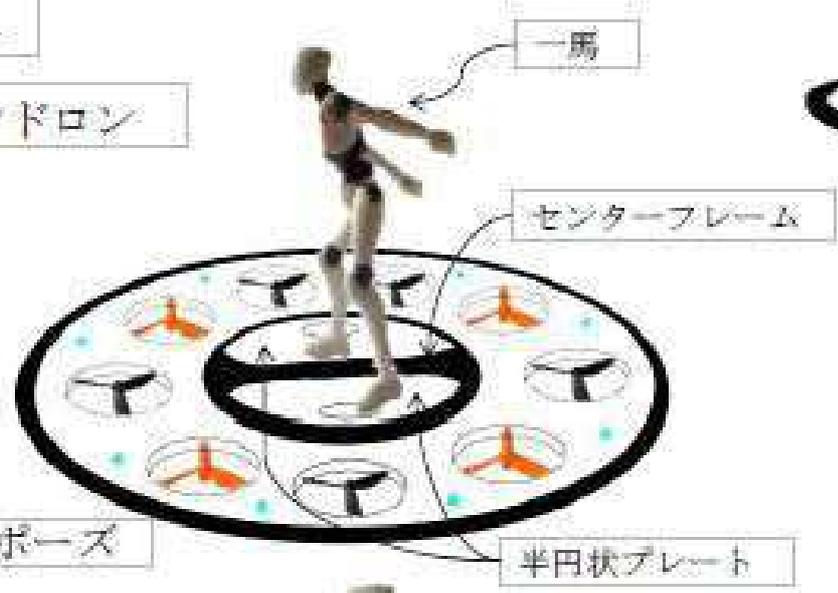
と一馬を指さす。

一馬、涙を見つけられ、苦笑いする。

(終わり)

図-1

アランドロン

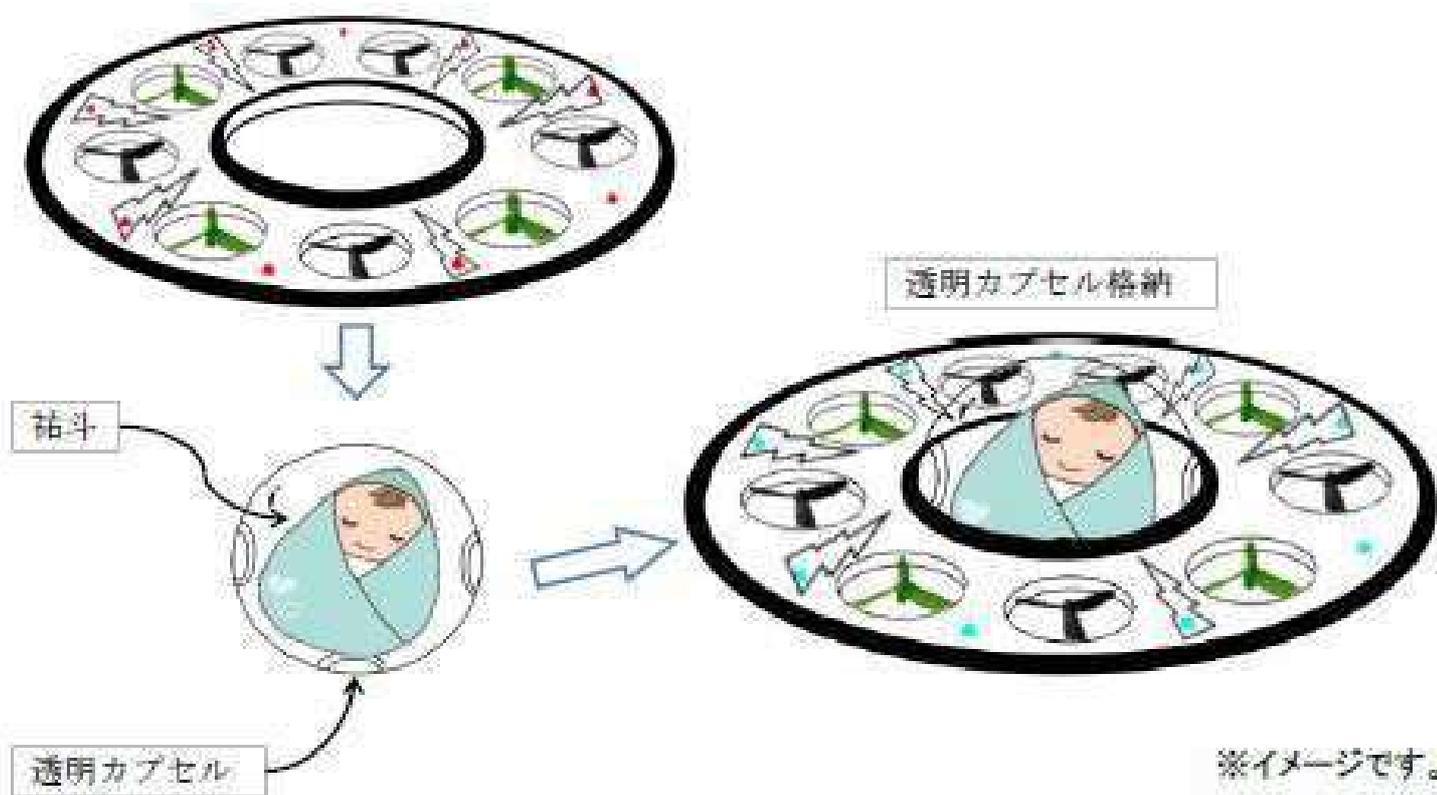


座りポーズ



図-2

ドーナツドローン



※イメージです。

図-3

ポストロン



※イメージです。

図-4

レオナと副署長

副署長

レオナ



図-5

オープンカー

この状態のまま発進



左手詳細



平面詳細



図-6

トイレットX



股間詳細



平面詳細



※イメージです。

图-7

300SL



图-8

①



②



③



④



⑤



⑥



⑦



⑧

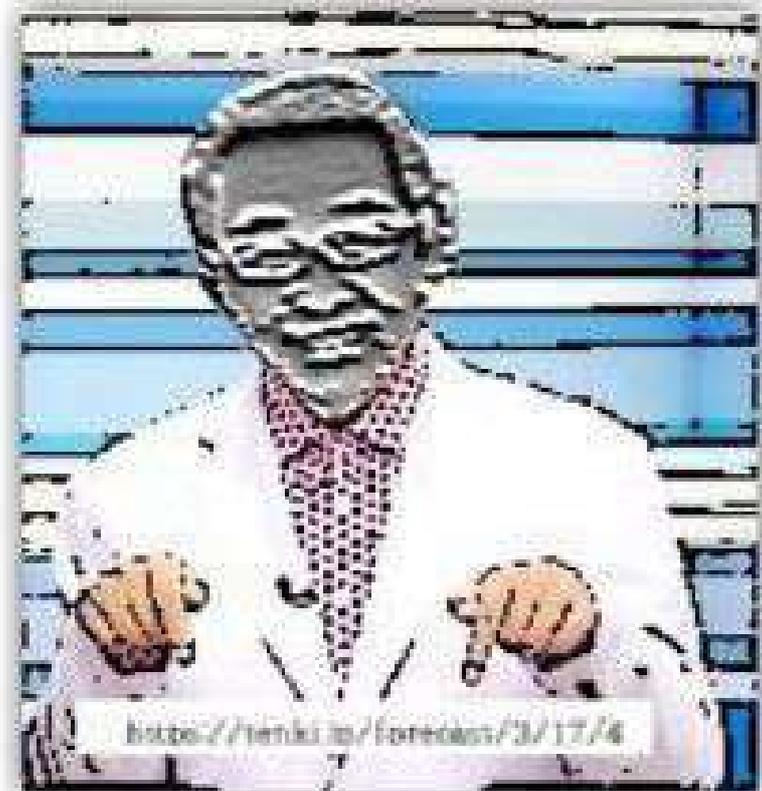


⑨



図-9

詳しくはwebで



※イメージです。

図-10

300SLと鬼島



図-1-1

UTA戦闘機 (パルテノン)



脱出する森田ら

組織のアジト・メイン指令室

図-12

UTA戦闘機 (アップル)

組織のアジト・メイン指令室



300SL (ボーンズ)